

株式會社國民畫報社 刊

滿洲文學二十年

大內隆

大內隆雄著

910.29

0943

910.29

0943

滿洲文學二十年

株式會社國民畫報社 刊

滿洲文學二十年

大內隆

910.29  
G943

大內隆雄著

910.29  
G943

滿洲文學二十年

滿洲文學二十年

大內隆雄著

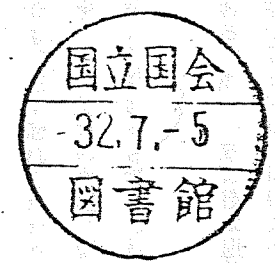
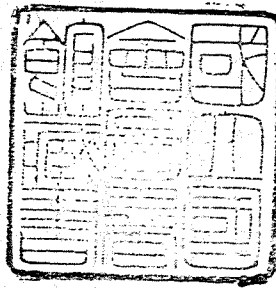
910.29  
ø943m

大內隆雄著

滿洲文學二十年

株式會社  
國民畫報社刊

910.29  
8943



U 56117

序

大内隆雄君は滿洲文學に於ける三つの時代を通つて來られた。

第一は建國前、滿鐵附屬地の生活を中心とする時代、第二は滿洲建國を境とする動亂と變遷の時代、第三は民族協和を基調とする藝文勃興の時代である。

大内君はこの時代を貫いて制作し指導し活動して來られた。だから大内君自身が生ける滿洲文學の歴史であると云ひ得る。

此度大内君の著された「滿洲文學二十年」は大内君自身の歴史であると共に、滿洲文學で反映せる滿洲建國の歴史である。時代とその背景をなす思想は生々と現實的にこゝに描かれてゐる。而して將來の滿洲文學の發展への約束はこの書によつて宣言されてゐるのである。この意味において之を江湖に推薦する。

武藤富男

## 自序

大正十年、筆者が長春に移り住んでから、足掛け二十四年の歳月が経つてゐる。筆者はその後、上海、大連、奉天等に住み、昭和十年また新京に歸つて來たのであるが、その間も絶えず滿洲の文學と關係を持つてゐたと言つてよいと思ふ。本書はこの間の滿洲文學を中心としての私の思ひ山の記である。また以つて滿洲新文學の側面史としての資料をも提供することを期したのであるが、更に讀み物としても堪へ得るやうにと考へたのであつた。そして第一章から第十章までは、康徳九年の一月から十月までの雜誌藝文に連載した原稿に若干の修訂を加へたものである。第十一章以後は康徳十年一、二月の間に書いた。

完全なと言へるやうな滿洲文學史の編著はなほ今後になさるべきことであると考へられる。本書は上述したやうな由來から生れたもので、精粗必らずしも均齊を得ず、また筆者の主觀に偏したやうな部分もかなりあることをおことはりしなくてはならない。それでも、古く忘れられたやうな本に少し、いまは別な部分で活動してゐるやうな人々の會つての仕事について回想することは、若い私達にとつて必ずしも無意義なことではないであらう。今日の滿洲文學といふものが形成されるに至るま

では、そのやうな先人の勞苦が、嘗みがあつたのである。滿洲を愛し、この國土の上に文學を育てようとしたさうした人々の處女地に卸した歎があつたのである。本書の成る、またそれらの人々の名蔭でもある。懐しい回想と感謝の念で私は筆を執り續けたことであつた。

なほ滿洲公論社小原克己氏、本書刊行を諾してくれた奥一君への直接の謝意を誌して置きたい。

目次

第一章 大正年代の追憶と荒川義英『一青年の手記』……………七  
第二章 同人雜誌『黎明』の頃……………二  
第三章 清島蘇水『三つの世界』など……………三九  
第四章 『我らが文學』、淺利勝、甲斐水棹など……………五  
第五章 満日の小説募集、『大陸生活』、『滿洲短歌』……………七一  
第六章 昭和初年の短歌壇と詩人たち……………八九  
第七章 續、詩人たち、『塞外詩集』、『三人集』、『燕人街』など……………一〇三  
第八章 稻葉亨二、石原巖徹や『街』、『線』など……………一三三  
第九章 『大陸文學』と當時の新聞雜誌……………一三九  
第十章 『胡同』、『曙人』と『滿洲文學パンフレット』そして『滿洲文藝年誌』……………一五  
第十一章 滿洲事變と文藝界、『高粱』の創刊……………一七七

第十二章 『高粱』のその後、『作文』その他……………一五三  
第十三章 新京日日及び各集團……………二〇八  
第十四章 『滿洲行政』と『モダン滿洲』……………二三四  
第十五章 滿洲文話會が出来て……………二四〇  
第十六章 『原野』刊行の頃……………二六六  
第十七章 『滿洲浪漫』そのほか……………二八六  
第十八章 滿系文學史の展望……………三三四  
第十九章 滿洲文藝家協會結成さる……………四〇七  
第二十章 康徳九年以後の概況……………四一七

## 第一章 大正年代の追憶と

### 荒川義英「一青年の手記」

新京に電車が開通したことからこの文章を書き始めようと思つたことであつた——と言つただけでは甚だ妙であらうが、新京に電車を敷くことになり、そのために新京へやつて来た或る人があつた。絶えて十何年（二十年近く）といふその人に偶然私は一百貨店のあたりで遇つた、その人といふのは、大正年代の滿洲文學に一つの位置を占めてゐた人であつた。私はその人たちとともに文藝同人雑誌を出したものであつた……さういふ因縁があつたからなのである。と、さう説明すれば、私のブラシの成り立つたわけも理解していただけるであらう。

さて資料を探さうとした。（だが流浪十餘年……そして、あの頃の、今にして思へば貴重とすべきその頃の同人雑誌の類ひは、この流浪十餘年、轉居十餘度の間にも決して紛失などしないやう努めて来た筈なのであつた。——大掃除の度に、私は家を清潔にすることはこれを専ら妻にまかせて、所蔵



本を一冊とても盗まれぬやうにとひたすらその方に神経を突らせて来たものである。そして私の所蔵本に何萬圓かの何分の一か火災保険も年来かけられてあることではあるし、さうすることが保険會社に對して思實な所以でもあつた。などと考へながら本を探した。明るいうちに家に歸り、しかも冬日暮れやすく、忽ちに電燈を點じて、手を煤けさせて、本の探求と兼ねてその整頓とをやつたのであるが、茅屋狭いながらも本・本のただずまひいとも複雑怪奇で、この一文のすつと後の方で欲しいと思ふやうな本は豊富に現はれ來つたが、肝腎かなめの、電車關係の大先輩氏を載せたところのものが眼の前に進行されて來ないのであつた。——さういふわけで、私の最初のプランはこれを變更することを餘儀なくされた次第である。(だが、茅屋もとより二十七平方米かそこらである。私はやがてこのプランを貫徹することが出来るであらう。家の隅々まで、押入れの奥まで、私は私の被保險財産を檢討するであらうからだ。閑話休題——)

突如としてだが、次の一文を御一讀ありたい。

「夜中の二時頃でしたらうか。わたしは起きて便所に出ました。わたしの家の便所は裏のはづれに別棟に建ててあるので小便は表へ出てやることに極めてゐますから、此の時も勿論浴衣の寝巻でスリッパを突つかけて外へ出たんです。何でも舊の四日位ぞつたと覺えてゐます、弦月が城内の空に高くのぼつて、寝しづまつた支那家屋が一層低く思はれるやうに伏してゐるんです。此の表道路は片側街で八月の日に照らされると箒草が六尺あまりに延びる、それが九月に入ると二三日の冷風で見ると影もなくこんがらがつて倒れてしまふ。結氷の時候になると此の路一つ越した曠原ウツクから急に賑やかになる。日々奥地から大豆を持ち出す馬車がつゞく、十數里の永氷の誤植であらう——大内原を経て來た六頭立ての大豆馬車はわたしの家の近くから道路に入り、それが幹道をつたつてステーションに向つて、息を眞白に凍らした馬はヨチ／＼と歩き去る。だから此の馬車が雪を踏みつけてゆく音がギユウ／＼と夜半から耳に這入るのをきいて、あゝ又寒い冬になつたと思ふんです。」

讀者諸賢は右の一文をどうお思ひになつたであらうか？ ステーションなどといふ言葉が使つてあるので、相當に古代物らしくも思はれようが、これは大正七年に發表された小説の一節なのである。この小説は「務明の夜」と題されてゐる。作者は荒川義典。それが載つたのは『民衆の藝術』と記録されてゐる。——記録されてゐる、と書いたのは、實は私はその雑誌を見たことがなく、私は荒川

義英稿「一青年の手記」から右の一節を寫したからなのである。

荒川義英稿「一青年の手記」といふのは大正九年に出版された單行本である。それは社會文藝叢書第二編である。(社會文藝といふ稱呼も、今にして考へれば面白いではないか)——因みに、社會文

藝叢書の第一編は、上村小劍著「生存を拒絶する人」である。その廣告文には、

往年我が國文壇へ最初の社會的文藝の提供者たりし著者が、彼のビイター・クロボトキンの著作により暗示を得たりと云ふ、奇しく妙なる社會組織と人生を描く。

とあり、「空想の花」「新しき世界へ」「分業の村」「黒王の國」「美人國の旅」「生存を拒絶する人」以上六篇の小説題名が掲げてある。

さて、「一青年の手記」は荒川義英稿であるが、堺利彦編である。そして生田長江、佐藤春夫、尾崎士郎、土鏡哀果、梶野孤蝶、生田春月、西川均、天杉榮の八人が跋文を書いてゐる。鈔々たる顔觸れと言ふべきであらう。

堺利彦がどういふ譯でこの遺稿集を出したかは、「本書の編輯者として」といふその序文にある。

荒川義英君は私の友人荒川衝次郎君の子であつた。私は彼を「ヨッチャン」として、彼の妹を「スウチャン」として、彼等の幼年時代から知つてゐた。ヨッチャンもスウチャンもおかあさんに

よく似た、丸い顔の可愛らしい子達だつた。

其後よほど久しく經つてから、或日突然義英君が私を尋ねて來た。其時はモウ十八九の青年だつた。然し私は矢張りヨッチャンを以て、彼を遇してゐた。所が、其ヨッチャンが、バナードシヨウがどうの、ツルゲネフが斯うのと、いろ／＼文學談をやりだすので、半ば驚き、半ば辟易した。

それから間もなく、彼は一篇の原稿を私の處に持つて來て、讀んでくれと云つた。折角持つて來たものを萬ざら讀まないわけにも行かず、せめて二三枚でもと思つて讀みかゝると、妙に引きつけられる様な氣持がして、たうとう一氣に讀んで了つた。……」

そして堺利彦は、その小説を安成二郎に讀ませ、荒畑寒村に讀ませ、土岐善麿の所に持ち込んだのであつた。土岐善麿はそれについて、

「荒川君は、小さな雜誌などを出してゐた僕からこんな口添へをされるにはもつと藝術家としてすぐれたものを持つてゐたことを僕も認める。その後雜誌に送つて寄越した小品等もみな彼の特別な素質を現したものであつた。彼は確かに文壇に現はれて一つの地位を占めるべき人であつたが、身體がいつも弱くて、思ふ程に力を出せなかつたことは、本人はもとより、紹介者の一人として僕も残念に思ふ。」

と書いてゐるのである。

佐藤春夫は——佐藤春夫先生はいま幾歳になるであらうか？ 『文藝年鑑』で調べて見ると、明治二十五年生れとある。ならば、今年五十二——案外若いことを知つたが、然らば大正年代の始め頃である。佐藤先生も若かつたわけである。と、このやうに年齢についている——と書いたわけは、同書に佐藤春夫が次のやうに書いてゐるからなのである。

「その頃、彼は二十一、二であり、僕は二十三、四歳であつた。僕と彼との交際はこんな風で（大内記——こんな風で、と言ふのは、その前の方にある——「荒川は考へ出すと實に怪しからん男であつた。何の因縁もなく僕の怪しげな貧乏世帯のなかへふらふらと這入り込んで来て、四五月ぐらゐも食ひ倒して、その間時たまには彼の女郎買ひや買喰ひの小使を徴發されたり、ちよつと貸せ大いに讀み度いと言つた本が直ぐ無くなつたり、例のゼンソクでヒーヒー言ひ出しては夜中に騒がされたり、出て仕舞つてからはいゝ加減僕の悪口をふれ歩いたりした——といふ交際なのである。）二年ぐらゐつづいて、いつしか消えて行つた。——憶へば、そのころ唯物史觀から出立した社會主義に満足しかねるやうな氣がした僕は、夏の晩など、あまり熱心でもない彼をつかまへて夜ふけまで論争しかけたものであつたが、蓋し、彼の如きは明治末期が生んだ一種の青年として長編小説中の一

役ぐらゐには間に合はないことはあるまい。」云々

ところが、荒川義英は實際に長篇小説の中に登場したのである。生田春月の「相寄る魂」といふ小説がそれである。その中に荒川義英はよく似た名前で出現してゐるのである。生田春月といふ人は、純情な、そして小心な人であつたやうに思はれる。恐らく「相寄る魂」はその自叙傳と見るべきものであらう。その中に書かれてゐる荒川義英も在りのまゝの人物に近いことだらうと推察されるのである。

その生田春月は本書には次のやうに書いてゐる。

「荒川義英君は何處へ行つてしまつたのだらう？——荒川君は死んだと傳へられた。そして私はその賑かな追悼會（？）の様をも見た。それは私の心にあの人の善い不良青年の面影を再び見ることが出来ないと云ふ事を確かめさせた。それなのに、私は荒川君が死んでしまつたのだとは信じられない。いつか、その顔さへも忘れてしまつたやうな時に、ひよいと出て来て、また昔のやうに人の目色をうかがひながら、御世辭を言つてくれさうな氣がする。

私たちはその日からその日へと追ひやられてゐる、なくなつた友人を深く悼んでゐる、と、ますますもない。友人の不幸は、それが癒やしがいやうなものまでも、私たちにはどうすることも出来な

と書いてあるのである。

佐藤春夫は——佐藤春夫先生はいま幾歳になるであらうか？ 『文藝年鑑』で調べて見ると、明治二十五年生れとある。ならば、今年五十二——案外若いことを知つたが、然らば大正年代の始め頃である。佐藤先生も若かつたわけである。と、このやうに年齢についている——と書いたわけは、同書に佐藤春夫が次のやうに書いてあるからなのである。

「その頃、彼は二十一、二であり、僕は二十三、四歳であつた。僕と彼との交際はこんな風で（大内記——こんな風で、と言ふのは、その前の方にある——「荒川は考へ出すと實に怪しからん男であつた。何の因縁もなく僕の怪しげな貧乏世帯のなかへふらふらと這入り込んで来て、四五月ぐらゐも食ひ倒して、その間時たまには彼の女郎買ひや買喰ひの小使を徴發されたり、ちよつと貸せ大いに讀み度いと言つた本が直ぐ無くなつたり、例のゼンソクでヒーヒー言ひ出しては夜中に騒がされたり、出て仕舞つてからはいゝ加減僕の悪口をふれ歩いたりした——といふ交際なのである。二年ぐらゐつづいて、いつしか消えて行つた。——憶へば、そのころ唯物史觀から出立した社會主義に満足しかねるやうな氣がした僕は、夏の晩など、あまり熱心でもない彼をつかまへて夜ふけまで論争しかけたものであつたが、蓋し、彼の如きは明治末期が生んだ一種の青年として長編小説中の一

役ぐらゐには間に合はないことであるまい。」云々

ところが、荒川義英は實際に長篇小説の中に登場したのである。生田春月の「相寄る魂」といふ小説がそれである。その中に荒川義英はよく似た名前で出現してゐるのである。生田春月といふ人は、純情な、そして小心な人であつたやうに思はれる。恐らく「相寄る魂」はその自叙傳と見るべきものであらう。その中に書かれてゐる荒川義英も在りのまゝの人物に近いことだらうと推察されるのである。

その生田春月は本書には次のやうに書いてゐる。

「荒川義英君は何處へ行つてしまつたのだらう？ 荒川君は死んだと傳へられた。そして私はその賑かな追悼會（？）の様をも見た。それは私の心にあの人の善い不良青年の面影を再び見ることが出来ないと言ふ事を確かめさせた。それなのに、私は荒川君が死んでしまつたのだとは信じられない。いつか、その顔さへも忘れてしまつたやうな時に、ひよいと出て来て、また昔のやうに人の目色をうかがひながら、御世辭を言つてくれさうな氣がする。

私たちはその日からその日へと追ひやられてゐる、なくなつた友人を深く悼んでゐる、と、ますますない。友人の不幸は、それが極やしがないやうなものまでも、私たちにはどうすることも出来ない。

い場合が多い。自分自身の生活だけが既に堪へられない重荷なのである。かうして荒川君もまた私の生活から消えてしまふのかと思ふと、單なる諸行無常の感では片づけられない、一種言ひ知れぬ寂寥の感に打たれざるを得ない。

然し、今日、夭折した才人の遺稿が集められて、荒川君の記憶を私たちの胸にあらたにするのみならず、一般の讀者界にまだ十分に評價されなかつたこの人の眞價を示すことが出来るのを考へると、私は喜びに堪へないのである。すべての早世した人々の藝術は價値を別としても、なほ深く私の心を動かす、それがまして或る程度まで近接してゐた友人のであるに於てをやである。

荒川君は澤山の逸話を残して行つた、然し私は今はそれを語るべき場合ではないとも思ひ、またそれを語るべき興味も有たない。たゞこの、その一生が既に一つの小説であつた人の藝術が、適當の評價を文壇に贏ち得むことを祈るばかりである。

思へば、このやうに書いた窪田春月は「その日からその日へと追ひやられ」るところか、瀬戸内海に追ひやられてしまつたのである。今の若い人たちは、春月をさへ知らぬといふやうになつて來てゐるであらう。その「柙寄る魂」の如きは、何と幼稚な小説だとして卻けられてしまふかも知れぬ。しかし、そのやうな時代も會つては存在したのである。そのやうな魂も、あの大正年代には生きてゐたのである。

たのである。

どうも私は、荒川義英の外廓ばかりを語り過ぎたやうである。

『一青年の手記』が出たのが大正九年。その前年であらうと推察されるが、彼は二十六歳で大連で死んでゐる。

私が長春に來たのが大正十年であつた。私は荒川義英の殿父、荒川銜次郎氏を知つた。それは私の叔父が商賣の關係で氏と相識だつたからである。

荒川銜次郎も文化人であつた。佛人であり、エスベラント語であつた。滿洲エスベラント語の長老として功績あつたことは、同志(エスベラントの同志の謂ひである。これをエスベラントで *Spindano* と云ふ)諸君の熟知するところである。一昨年内地へ引き上げられた。(そして昨年、東京で病逝された。)

なほ荒川義英を知つてゐる人に、岡益こと岡田益吉氏があつた。

「追悼會をやらうよ。」

などとよく言つてゐたものであるが、當時は益さんも忙しく、つひに實現しなさいました。……さて小説「務明の夜」にかへらう。

それは次のやうに書き出されてゐる。

「一週間程前わたしの家にも二十名といふ出征軍人が泊り込んで、九十日といふものは商賣がまったく中止の姿でした。軍人さん達が出發なさつてからは町のお客様もお待ち兼ねとあつて宵からぞろ／＼押しかけておいでなすつた。そこで急に家中が賑やかになり女供は連夜一人のお客（茶の誤植であらう）引きもない有様で、只困つたのは軍需品輸送の爲め貨車不足とあつて、大阪から一箇月前に送つたといふ小包の海苔や花あられが着かず、ビールのお肴類がすつかり品切れになつてゐる事です。」

達者な書き振りだと言ふべきであらう、二十何歳でこれだけに書いてゐるのだから。それはそれとして、これでもわかるやうに、この小説は女郎屋の親爺が物語るといふ形式になつてゐる。

「斯ういふ好い日のつづいた或る晩の事です。わたしの家の女供のうちで古株で相當に賣つたお美代といふのがありましたが、それが今年の二月客に連れられて哈爾濱から齊々哈爾濱見物に行つたとき、汽車の中で冷えたのから病らひつき肋膜炎をやられて九箇月近くも寝たり起きたりして、近頃寒くなつて又どつとわるくなり、すつと二十日も氷をあて、居るんです。勝氣な女で生れは天草ですが、一寸見は都會の娘らしく、客づきが好いので他の女供から多少の嫉妬を受けてゐたため寝

込んでからは、自分で非道く氣にし、主人であるわたしの手前も具合悪く思つて今日から出る、明日から出るといつてゐますが、なだめて寝かしてあつたんです。其後少しは好いやうな顔をしてゐましたが、醫者はたうとう結核であることを私等夫婦に迄宣言しました。私も驚いたが、本人には國へ歸つたらどうだ、多少の借金ぐらゐは氣にかけなくとも好いと云つてやつても、國へ歸るのは死んでも嫌やだと云ひます。生みの母にはお金さへ送つてやれば好い、若し御深切がありましたら恐れ入りますけれども、二十三回送つてやつて下さい、先月もこんなからで稼げませんから送れなかつたんです、とわたしに云ひます。」

その女が、さういふ身體で、深夜に抜け出し、天幕の中へもぐり込んで商賣をし、擧句の果ては或る人を「西洋剃刀で殺さうとして」おさへられるといふ話である。淡々とした語り方で、しかも一抹の詩情をたゞへて、それが物語られてゐる。その一抹の詩情とはヒューマニズムに通ふものだとも言へよう。大正年代の文學の香ひが強いことが回想されるのである。

このやうな小説が、會つて長春こゝに於いて書かれたといふ事實は記憶に留めて置いてよいであらうと思ふ。

橋順四郎等の『燕人街』が出た。

文藝運動の多くが大連を中心としてゐたのは勢ひの然らしめた所であるが、長春に於いて大正十三年頃出た『黎明』（評論、創作、詩、短歌等）、撫順、遼陽の盛んな俳句熱等は特記していい。

創作は諸新聞、『讀書會雜誌』（のち『協和』）『新天地』、『大陸』、『大陸生活』、『滿蒙』、『月刊撫順』等で個々人によつて發表されたが、瀨野浩太、淺利勝、谷川らん、清島蘇水、井上葉吉、横澤宏、志野羊吉等があり、清島は『三つの世界』を出して歸國、淺利は『淺利勝集』を残して早逝した。

## 第二章 同人雜誌『黎明』の頃

大正十年、私は渡滿し、長春に來た。

當時、長春には中學校はまだ無く、前年に商業學校が出來ただけであつた。私は内地の中學一年を修了して三月の末に渡滿したのだつた。

私は長春商業の二年へ編入試験を受けた。私と同時に同じ試験を受けた男がゐた。柿沼實だつた。尤も彼は滋賀縣の八幡商業の一年を済ましてゐた。

柿沼と私は始業式の日初めて名乗り合つた。爾來彼は長い間、私の文學の友となつた。彼の方が私より年上であつたし、すでに當時の『赤い鳥』に童謡などを投稿してゐたそんな経験も持つてゐたし、兄貴格だつたのである。

私と柿沼とが加はつた學級に淺利勝がゐた。淺利については、後にまだ多くの書くべきことがあ

る。

長春商業第一期生には變り者が多かつた。ほかの中等學校に何年か既に行つてゐたといふやうな経験を持つ年輩の者さへ若干ゐた。鮮系が二人ゐた。當時一學級だけで五十何人ゐたのだが、第一回生として卒業したのは僅か三十人だつた。死んだ者もゐるし、退學した者も居り、落第して行つた連中もかなり多かつたのである。柿沼なども後に退學した組だし、淺利などは落第を重ねて退學の已むなきに至つた念入り組であつた。

此處で、當時長春で刊行された文藝同人雜誌『黎明』について書かねばならぬ。

『黎明』については、先づ小倉吉利と山本留蔵とについて語る必要がある。小倉も山本も當時滿鐵の下級青年社員だつた。當時は滿鐵社員と言へばなかなか威張つたものであつた。一流の料理屋へでも、月末拂ひで飲み(遊び)に行つたものである。が、小倉や山本はそんな所へはあまり行かぬ方の組だつたのだらうと思ふ。相謀つて『黎明』を出すことを決議したのである。

初期の『黎明』はザラ紙に謄寫版で刷つて綴り合せ、それにコンニャク版で刷つた表紙をつけた、

そんな體裁のものであつた。

今思ふのだが、山本は一種の行動派であり、また劃策屋だつたのであらう、辯舌の雄でもあつた。

それに比べて小倉は着實であり、黙々として舞台裏の、或ひは地下室での仕事に専念するといつた型であつたやうである。そして、當時の舞台裏といふのは、滿鐵益濟寮の一室であつた。小倉吉利が其處にゐたからである。

柿沼が何かの關係で(彼の父も滿鐵に勤めてゐた)小倉たちを知つて、私をも引き込んだのだと思ふ。このあたり私の記憶も些か曖昧である。ともかく、私も『黎明』の會員か社友になり、詩や感想みたいなものを書いて謄寫版印刷時代の『黎明』に出したのであつた。

やがてこの『黎明』は發展し(それには滿鐵といふ職場を基礎に組織を擴げたのである、そして會費なども給料から差引くといふ堅實なやり方を採つた。)總領事館から正式の許可を貰つて活版印刷によつて發行されることとなつた。

此處で、前回の冒頭に書いた新京の電車開通に因む人物の登場となるのである。それは夢島鋪雪氏である。夢島(武藤が本名)さんはすでに相當の年輩の方であり、『黎明』のために大きな投助をされた方であつた。氏は岡本綺堂、額田六福の流れを汲む劇作家であり、作品數篇を『黎明』にも寄せら



れたのであつた。

その武藤さんと、私は久し振りで、新京に電車が開通する直前に遇つたのであつた。「黎明」が創刊されたのが大正十一年であつた。まさに二十年の昔を、お互ひに思ひ出して、感慨無量だつた次第である。

『黎明』は大正十三年に至つて滅びたと思ふ。中心人物が長春を去つたり、また後に續いた者が新しい發表機關を持つやうになつたりした結果なのであつた。

與謝野寛らの第二次の『明星』が創刊されたのが大正十一年であつた。手もとに大正十二年一月發行の第三卷第一號がある（『明星』は半年毎に巻數を改めたのである。）——實は私はこれに短歌を投じ、一首が私の本名で掲載されてゐる。平野萬里の選である。

ふるさとの寺の前なる電信の柱をおもふにくき瞬間

といふわけのわからない歌である。尤もこれは數首の聯作のうちの一首なので、故郷の町にゐた愛

嬌者の氣狂ひをうたつたものなだつた。一首だけ抜き出されてはとも、當時永井荷風、堀口大學、茅野蕭々、高村光太郎、野口米次郎、竹友藻風等々のお偉方たちの書いてゐる雑誌ではあるが、嬉しくはあるが困つたことであつた。

『未踏路』といふ雑誌を城所英一たちが東京で出したのがやはり大正十一年である。私はその大正十二年四月號を持つてゐるが、巻頭に城所の次のやうな詩が載つてゐる。

町

地平にほうりあげられた

血まみれのデイスカス

血の雫がぼたぼたと滴り

針葉林が吸ふ

積雪の青さよ

針葉樹の茂みに  
無縁の卒塔婆

地下に 人間の骨の  
めりめりと凍り

夥だしい狼の群が  
おゝ 月に飛びつく

思へば、城所英一も元氣なものではあつた。後年、『協和』の編輯者として鳴らし、今は華北交通でやつてゐる。因みに、『未踏路』の同人は戸次正美、富田充、谷口傳、田畔忠彦、大井學、綱島貞、山村良男、牧野精一、福富静兒、二葉夢都子、佐川義尙、城所英一、宮城三郎、白鳥信夫であつた。このうち、田畔忠彦はあの詩人にして映画評論家たる北川冬彦の弟である。この弟も詩を書き、後に

『面』といふ詩の雑誌を出したりしてゐる。宮城三郎は『文章俱樂部』によくコマ繪を投稿してゐた。

新文章日記』の表紙にも數回當選した。後に藝術的謄寫版印刷業を開業した。

(私は大正十二年に口語歌集『砂』を私家版として作つたが、これはこの謄寫版印刷屋——黒船社で刷つて貰つたのだつた。)

富田充がいま歌人として大いにやつてゐることは人の知るところ。富田もこの『未踏路』には詩を書いてゐる。

白鳥信夫といふのは横澤宏の當時の筆名だつた。右の四月號に確かに、滿洲での作品と思はれるものがあるから紹介して置く。

人 情 白 鳥 信 夫

枝にひつかゝつて  
生命の絲は切れてしまつた  
こうした高麗鳥の屍體に涅槃のそゞろな風に  
冷たい胸毛を夢のやうに ふむわりとそよがせてさる

あゝ 憐愍のなみだを

人情は村はづれの丘阜に

思ひがけなくも拾ひはしなかつたか

こんなにのどかな

鯨のやうな季節にさへ

これほど人情はしべりあのやうに蔭鬱であるのか

どこにも まんぢゆう墓が起きあがりたさうに

いたましくも愁へてをる。

あゝお友達よ

こんな人情は廢寺のえんの下で

運命にくづれた乞食の木乃伊ではあるまいか

また因みに、あの有名となつた詩の雑誌『亞』が大連で創刊されたのは大正十三年であつたやうである。『亞』は昭和二年の十二月に第三十五輯を終刊號として刊行しその生命を終つてゐる。この終刊號に北川冬彦が次のやうに書いてゐるのである。

「わたしにとつて『亞』を回想することは、大正十三年以來のわれ／＼の新詩運動が、わが詩壇に對してどのやうな貢獻をいたしたか、或はどのやうな罪禍をのこしたかといふことを検討することになつて了ふのである。」云々

この『亞』に執筆した人々は、安西冬衛、瀧口武士、北川冬彦、尾形亀之助、三好達治、富田充、城所英一、加藤郁哉、春山行夫、水原元子、山道榮助、加藤輝、横井潤三、城戸又一、本廣禮、朱川雅之助、廣田文雄、中溝新一、岸寅吉、武井濂である。安西、北川、三好、屋形、瀧口が同人だつた。

『黎明』のことに返らう。

啓寫版時代の『黎明』に原稿を書いた一人に藤藤通男がゐた。今は滿洲國の交通館にゐるが、當時は滿鐵にゐた。そしてチェホフの短篇などを譯したのだつた。

「黎明」の有力人物として、豊高直が入つて來た。當時は堀川艶之助といふ筆名で活躍したものであつた。當時まだ獨身で、三笠町界隈でも活躍したが、今何處に居るかと思つてゐたが、近着の「文藝春秋現地報告」に、牧野義男特派員の「厚生列車に乗つて」があり、それに濟南鐵路局の豊高厚生科長といふのが登場して來る。これがそのかみの堀川艶之助なのだらうと思ふ。艶之助科長は語つてゐる。

「最初、厚生列車を始めたのは満鐵で、多分昭和三、四年頃だつたと思ひます。當時は廉賣車と娛樂車だけの三輛編成で、名稱も確か慰安列車といつたと思ひます。巡回映畫班が民衆慰問に出かけるに當つて適當な宿屋がなくて不自由だつたところから思ひ附いたのでせうね。昭和九年頃から五輛編成にしました。満鐵は現在この種の列車を二個列車持つてゐます」云々。

小倉吉利は雙廟子驛の助役になつて行つた。雙廟子では勝寫版刷りの小新聞を刊行したりしたさうである。

ほかに町田律がゐた。彼は滿電の倉庫主任くらゐだつた。

「黎明」第三卷第三號の内容を御紹介する。

評

燒芋と拾錢

吸金鬼子

誰の罪

深刻

五年前の歌

石塊

蛾

銀の小箱

第一戰

冠者帳

三人評「ドモ又の死」

感じ

市木實二郎

淺利 勝

吉田 繁

千 鳥 生

吉本 芳花

吉本 芳花

市木實二郎

巳 之 留

上田 玲子

山本 留藏

大瀨 冠者

眞實二郎、隆雄

盲 評 生

机上語

X X 生  
未 血 路

市木實三郎といふのは種沼實である。「屏」は戯曲。秋田雨雀あたりの影響を受けたらしい作品である。

淺利勝の「焼芋と拾錢」は彼の初登場作品だつたやうに思ふ。

「土曜日の學校がへり、書生をして學校に通つて居るAは、辻の焼芋屋の所に立止つた。彼は拾錢しかポケットにもつて居ない。それを握りしめながら、

……百匁、トールチエン?

と日本語と支那語とを半分づつ云つて、釜の中をのぞいた。

……百匁拾錢。

と支那人は全部日本語で流調ではなかつたが答へた。

……百匁、ケー。

……少々マンマンデ、センザイ少々かたい。

彼は焼芋の前にじつと待つて居るのが嫌だつた。

……ホー、マンマンデオードライ。

と云つて歸りだした。」

といふ所から始まり、主家に歸り、掃除を済まし、がっかりしてゐると、寄宿舎にゐる友達が三人訪ねて来る、火を貸してくれといふ、餅を持つて來たのだつた、みんなで餅を焼いて食ふ、彼は焼いもを買はなくてすみ、彼の腹は豫算外の御馳走に満足する。

「餅はなか／＼消化しないので（腹は）大きかつた。

その晩はバカに御馳走だつた。目は欲しがつたが腹がうけつけなかつた。

妙な腹立たしさがせなかをたてに走つていつた。

X

彼が風呂にはいるとき、ポケットから拾錢白銅が落ちた。拾錢はコロコロと輪を滾らせて倒れた。彼は靜かにそれを拾つて又ポケットに入れた。」

で終る、微笑ましい作品である。「妙な腹立たしさがなかにたてに走つていつた」といふあたりなかなか新しい描寫ではないか。「焼芋と拾錢」は一般にも甚だ好評であつた。「銀の小箱」上田玲子とは實は私である。雑誌を賑やかにしよう、こんな一時的な名前を使つたのだと思ふ。有島武郎の「ドモ又の死」を豊高、柿沼、私の三人で批評してゐるが、これは本を廻覽し、各自が本の終りに書きつけたのを集めたものだつた。さういふ勉強の仕方もしたのだつた。

「黎明座第一回公演上演脚本並役割書」とは次の如きもの。

乍憚口上申上ます。此の度筆を執つては、小説、脚本、詩歌、俳句と一騎當千の若者達、舞臺に立つて、口で饞舌つて、仕種もやつて、行くとして可ならざるなきの境地を示さうと、即ち思ひ立つたのが、自作自演の黎明座一同。華々しく某月某日より某劇場に於きましてと言ふ所ですが、遺憾乍ら共に未定でござりますれば、表題の如く上演致しまする脚本並びに役割だけ、次の如くとはござりまする。

秋の一日(市木實二郎作)

市木源之進

小出 桂峰

遠山紋三郎

松本多智男

或る男

未 定

初音

堀井まさを

楓

市木實二郎

武士三名

未 定

離散(大内隆雄作)

おまさ(母)

藤木 騎人

定一

奥田美登詩

その妻

堀川艶之助

慶吉

未 定

戯れ屋(岩田力藏作)

男屋

岩田力藏

女屋

市木實二郎

x

沈四郎  
照さん  
小母さん

岩田力藏  
市木實二郎  
山本留藏

三六

(註沈四郎は男星に、照さんは女星に、何處か似通つてゐることが必要なり)

内海落(夢島鋪雪作)

左馬頭源義朝

夢島鋪雪

悪源太義平

白石餘潮

中宮大夫朝長

大内隆雄

鎌田兵衛正家

奥田美登詩

佐渡式部大輔重成

松本多智男

平賀四郎義信

市木實二郎

澁谷金王丸

藤木騷人

青幕の長者大炊

吉田繁

大炊の娘延壽前

堀井まさを

延壽娘の夜叉姫

北島高

鶯栖の玄光

小出桂峰

一空法師

岩田力藏

以上のやうなものである。

本當に芝居をやるのかと期待した向きもあつたやうだが、實はこれは私の惡戯だつた。小出桂峰は  
本田啓法で、眞面目な滿鐵社員、「黎明」の會計方だつた。堀井まさを、北島高は長春商業の後輩。

白石餘潮はいま滿業にゐる白石吉男、餘潮は私が贈つた雅名である。

次に、長春實業新聞について書かねばならない。

大正十三年だつたと思ふ。同紙は創刊何年かを記念して短篇小説を募集した。これに一等入選にな  
つたのが瀋島蘇水で、二等が私、三等が淺利勝だつたと思ふ。

瀋島蘇水は、牧水派の歌人で、田山花袋などに私淑してゐた相當な年輩の人。後に小説集「三つの  
世界」を出した。

清島氏が長春實業に出したのは「盗難」といふ作品だつた。實際に盗難に遭つた話を書いたもので、氏はその賞金で盗難による損失を取り返したといふ噂だつた。後に、清島氏は同志を集めて素人劇團・路傍社を作り、堂々長春座で公演をやつたものである。そのことについては、後年、柿沼が長春實業に次のやうに書いてゐる。

長春には第一に上げなければならぬ「三つの世界」の著者清島蘇水氏がある。清島さんは芝居の好きな人で、例の今は無くなつて了つた「路傍社」といふ劇愛好者達のわづか計りで組織されたのに、舞臺監督をした事があつた。その時分上演したのは、菊池寛の「父歸る」、山本有三の「生命の冠」、「嬰兒殺し」、里見淳の「新樹」等だつた。それが第一回で第二回には、菊池寛の「時勢は移る」、六福の「真如」、赤松の「鷄舍」、邦枝完二の「落花無情」などだつた。

清島さんは自分で柝をたゞき、プロンプターをやり、自分で犬の鳴聲迄やられた、私達はその眞剣さに涙ぐんだ事だつた。

### 第三章 清島蘇水『三つの世界』など

長春實業新聞が、たしか大正十三年に短篇小説を募集したことについては前に書いた。それは第一回のことだ、大正十四年に同じやうな第二回の催しが行はれた。そして、その時にも私は投稿したのだつたが、それでは私の「感情の微燈」といふのが一等に入選した。

「泥にまみれた雪がきたなく汚れて、石のやうに凍つてゐる夕方の道をだまつて歩いて行つた。私と私の父である。仕事に失敗して故郷の遠戚を頼りに歸つて行く父と、それを見送る私との二人であつたのだ。

私達父子が満洲に渡つてから、五年の月日は流れてゐた。それは私にとつては、漸く子供の世界から、酸苦に満ちた世界の中に足を向けて行つた時代であつたが、父にとつては、失敗と焦燥と困窮とが計數毎に變更か繰返されて行つた生活なのだ。」



右のやうな書き出しで始まつて、

「運んで来た青い盞の酒を、私は何杯か飲み乾しながら、熱くなつて来た心で、心のうちで叫び続けた。

『俺にだつて出来るぞ、見てゐる、俺の仕事を、俺は俺の仕事をやつて見せるぞ……』

叫ぶと心が瞬間に、すうつと擴がつて行つた。何もかも包んでしまふ事が出来た。椅子、卓、額、酒盃、時計、窓、建物、夜の空、みんながみんな私の心の中に飛び込んで来て、私に接吻して行くのだ。わくわくした歡び、悲壯の上に掴んだ生れ出るものの喜びがぐいぐいと私の胸をゆすつてゐた。」

さういふ所で終つてゐる、その間に映畫「茶を作る家」を観た時の感想が織り込まれてゐる短篇である。父が失敗して内地へ歸るといふのは眞實でないが、大體の境遇は事實に即してゐたと云へる。この時の二等當選が、前にも書いたことのある堀川艶之助で「衝動」といふノ説だつた。北へ向ふ列車の中で、會社勤めの二十一歳の女が、眼に煤煙が入つて困つてゐる、同行の支店長にそれを取つて貰ふ、それは自分から甘えて行つた姿態だつた、座席に歸つてから、急に男に惹かれる衝動を覺えて來る、さういつた題材を描いたものだつた。

こゝで、前回の時もさうだが、これらの小説の選をした人々について書いて置かねばならない。それは長春實業新聞の編輯長をやつてゐた老木近信と、上野由人、山澤開作の三氏だつたのである。

老木氏といふのは、一風變つた人物だつた。大體長春實業新聞といふのが、創刊當初から變つた行き方をして、何でも正式創刊の少し前に、或る一日の實際の出来事に基いて一枚の新聞を作つて見た、そしてその時の働き振りに依つて、編輯長以下を決定したといふのである。その初代編輯長が老木先生であつた。(後年、私が長春實業新聞の後身たる新京日日新聞に入つてからも、印刷工場の方には老木先生をよく知つてゐる十何年勤續の満系職工がゐるものである。)當時は老木先生も若く元氣で、自ら毎日社説を書き、編輯をやり、そしてよく酒を飲んでゐた。あまり學歴も無いといふのに、趣味の廣い、そしてしつかりした識見を持った努力家だつたのである。(あの頃だからこそ出来たのだが、何かの問題でサーベルを持つた長につくお偉方と大いにやり合つたといふやうなこともあつた。)

上野由人氏を知る人は多かつた。當時は村木商だつた。後年、カフェ・モナミ(今の銀座會館の場所である。)を經營し、更にダンスホール、キャピタルを經營した。不幸、病に仆れた。菊池寛、久米正雄らが滿鐵の招聘で始めて滿洲にやつて来た時、長春で案内役を買つて出たりした人であつた。

小澤開作は當時長春で齒科醫を開業してゐた。言ふまでもなく、後の協和會の小澤開策である。今は北京に在つて『華北評論』をやつてゐる。

先づ老木、上野、小澤、それに後にツーリスト・ビニローに行つた西田鶴萬夫などが當時の長春の文化人だつたのである。西田は野球の選手でもあつた、また高級映畫藝術協會などを組織し、優れた歐洲映畫の上映をやつたりしたこともある。その外、西春彦、井上信翁、土肥顯、野田俊作なども長春にゐたことがあるが、在住期間が短かつた。上野や、小澤は長春野球界のためにも大いに貢献してゐる。

その頃、全體的な雜誌としては『滿蒙之文化』（今の『滿蒙』の前身）『大陸』『新天地』『讀書會雜誌』があつた。この内、當時純文學的なものを載せたのは『新天地』であらう。

私の記憶に残るところでは、宮原欣、清島蘇水、谷川らん等が主として『新天地』に小説を發表してゐたと思ふ。宮原欣についてはなほ後で書く機會があらう。

谷川らんは、石川鐵雄夫人であつた、當時の滿洲としては稀らしい存在たる女流作家であつた。

清島蘇水は當時の作品を集めて大正十三年の末に、東京都本郷區駒込坂下町一八三の岩崎書店から『三つの世界』を出版してゐる。この滿洲取次所が私達のやつてゐた黎明社であつた。

『三つの世界』の序文に曰く、

「三つの世界」を上梓しようと思ひたつたのは、私が大正十二年の夏、大連港を振出しに四國、九州、本州から北海道の涯てまで數箇月の旅をつづけた時の途上であつた。小田原の椿白雨氏を訪ひ、いよ／＼その決心を固くした。といふのは、この出版について一切引受けてくれたからである。その上好都合なことには椿氏の親友である垂木文立氏が印刷の方を快諾され、装幀は彫塑家牧雅雄氏が骨を折つて製作された。かうして復とない機會を握つたものゝ彼の關東大震災は、私の小冊子の上へも及ばないわけに行かなかつた。

しかし、今やその努力は空しくなかつた。茲に謹で三氏の勞を深謝す。

南滿洲長春にて

清島蘇水

——といふのである。椿白雨とはどんな人か、私は知らないのだが、私がこゝにこの序文を引用したのは、いかにもこれには大正末期的な文學の時代色が出てゐると思つたからである。

ところで、著者は「小冊子」と斷つてゐるが、四六判三百八十六頁、ラフ紙を使った堂々たる小説集である。定價も二圓二十錢といふのだから、當時としては大したものであつた。——だが、この「三

つの世界』は、次のやうな挟み紙を帯びて現はれざるを得なかつた。それには

四四

缺丁に就いて

本書は、その筋の忌避に觸れ、差押へられたるも、百万之が諒解に努め、やうく二十、七頁より三十二頁までの削除にて發賣することを得ました。

依て缺丁の辯明とお詫申上げます。

とあつた。

收むる所、次の諸篇

木乃伊になる、鹽魚、三つの世界、盜汗、未練、死の價、飯、無情を感じた話、般若の小政、ルビトの指輪、戀も知らずに、工夫の子、死を願ふ心、嘘、長靴、母危篤、良心、幼きもの、慾に絡る二つの話

以上の十九篇である。そして削除の憂き目を見たのは開卷劈頭の『木乃伊になる』の一部分であつた。

この「木乃伊になる」といふのは、横濱に一舊友を訪ねる、その舊友といふのが女のことである。な經驗をした男である、その奇怪なまでの思ひ出話に主人公は壓倒されてしまふ、さういふ物語である。その中に次のやうな章節がある。

「松川は聞き終つて笑ふと云ふより、餘りの幻滅に挨拶の仕様がなかつた、この卑賤の事實を説きなく語る村瀬の人格が不思議に思はれた、考へて見れば八年前のこの男も矢張かうであつたらう、然し自分はその頃若かつたのだ、村瀬の斯の種の話が寧ろ歓迎されたのだ。それは今度人の親となつて何時知らず村瀬の性格に遠ざかることになつたのだ。寧ろ村瀬の一筋な性格が自然であるかも知れぬ、自分は或時に烈しい愛慾の念と戦つたことがあつたではないか、始めて人の親となつた時、その青春の逃げ行くを悲しんだではないか、或る女事務員の誘惑に心を亂したではないか、唯、その差は理性で押へたに過ぎないのだ。この際何れが正しいのかと議論は愚であらう。人若し女を見て淫らな心を起さば、姦淫したるに同じといふ耶蘇の言葉は恥しい程自分に充て嵌つてゐる。村瀬はそれを外的に行つたばかりだ。斯く云ふものゝ自分はさう云ふ愛慾を充したい爲に理窟を立てゝゐるのではあるまいか。

松川は斯う考へ及ぼすと、その本心にびつたりと觸れたやうにして、慄然とした。そしてこの女

達を訪問したことも或はさうした慾望を満したいがためではなかつたらうかと、淺ましい自分の心を疑はないでは居られなかつた。

（お前は何と云ふことだ、妻や子を離れると直ぐにこの状態、お前心は漸く眞の人生に觸れて来やうとしてゐるではないか、お前はなぜ出家とその弟子を渴仰して讀んだ、お前はなぜ一燈園の生活に憧憬した、お前はなぜニイチエの超人を學んだ。お前の内部生活は覗きからくりだ、次から次に變る、もつとしつかり、もつと掴むものを掴め）

松川は瞬間に激しい羞恥と悔恨の情に迫られて、このシンプルな舊友を憐に思ひ且つ羨んだ。

——こゝにも大正末期の「時代精神」といふものが甚だ明瞭ではないであらうか。

大正末期と言へば、菊池寛が「人生戀すれば憂患多しと、戀せざるも亦憂患多きを」などと言つてゐた時代である。葛西善藏が「夜、ストリンドベルグの『地獄・傳説』を女に買はせる。若き時分に讀みしことある本なるも、むづかしく讀みづらきこと甚だし。酒を飲みながらの故ならん。然しながら、僕の最も畏敬する愛讀書なり。鬱然たる巨匠の感じを如何ともしがたし、嘗て、スエデンボルグの本を自分も讀みたる記憶あるも、この作者の如く精透思貫なる見かたを知らなかつた。イブセンの

著作のことなど考へ憶ふ。」などと書いてゐた頃である。

参考までに、大正十四年の九月に日本でどのやうな作品が發表されてゐるかを調べてみる。

廣津和郎の「抗議常習者」（新潮）、稻垣足穂の「武石浩玻氏と私」（新潮）、岡木田虎雄の「雨」（新潮）、水守龜之助の「馬鈴薯と大根」（新潮）、中河與一の「地獄」（中央公論）、正宗白鳥の「昔の西片町の人」（中央公論）、牧野信一の「鏡地獄」（中央公論）、宇野浩二の「十軒路地」（中央公論）、野上彌生子の「茶料理」（中央公論）、同「一樹の蔭」（改造）、近松秋江の「銀河を仰いで」（中央公論）、松永延造の「淺倉リン子の告白」（中央公論）、室生犀星の「妻が星」（中央公論）、芥川龍之介の「海のほとり」（中央公論）、同「死後」（改造）、徳田秋聲の「髪」（中央公論）、同「幼児」（改造）、武井夢想庵の「cocuのなげき」（改造）、里見弴の「蚊やり」（改造）、佐藤春夫の「この三つのもの」（改造）、瀧井孝作の「ゲテモノ」（改造）、志賀直哉の「瑣事」（改造）等の小説。

北尾龜男の「女と氣をつけ」（新潮）、久保田萬太郎の「月夜」（中央公論）同「あぶらでり」（改造）、山本有三の「父親」（改造）、倉田百三の「或る警察署長の死」（改造）等の戯曲である。

「木乃伊になる」のこと、もう一つ。

この小説の中に「お互にMのM會社で机を並べた同僚が一度吹き募つた不景氣風に」云々といふ記述がある。無論これは、「滿洲の滿鐵會社で」の意味である。當時は滿鐵だけが滿洲を代表する大會社であつた。

以下『三つの世界』につき、私の流議で簡単に解説して行くと、「鹽魚」は放縱な夫を持つて、滿洲の片田舎で苦勞する入妻の生活を描いたもの。作品集の表題にもなつてゐる「三つの世界」は或る鐵道従業員の過失についての物語に、二つの寓意的其他の世界を對比させた小説である。「盜汗」は病氣になつた青年が、藝者から呪はれてゐるのではないかなどと妄想する話。「未練」は「盜汗」後篇に代ゆと傍題され、文學青年と一女性との心理の交渉を描いてゐる。「死の價」は滿洲勤務の兵隊の話。「敵」は惡戯心から鐵道線路に石を並べ、連行された貧しい支那人の子供がおいしい白米の飯にありつくといふ話。いはゆる滿人ものの先驅と言へよう。幼選な作本と今日では感じられるけれども。

「無情を感じた話」は、病氣で仆れる友人をめぐつての感想を基にした小説。生と死、夫婦の間、金錢と醫術、さういふ問題がこの短篇の中で扱はれてゐる。

「般若の小政」は、さう綽名をつけられた鐵道従業員の話。

「ルビーの指輪」は女事務員に失戀した青年が、今度はカフェーの女に軽くあしらはれるといふ物語。

「戀も知らずに」は平凡な結婚をした男が父となる際の感懐を扱つてゐる。

「工夫の子」は子供の眼に映じた複雑な社會相を描いてゐる。「死を願ふ心」は鐵道従業員が旅先で病み、漸く家に歸つて妻に介抱される話。「晴」は未婚の女教員が家庭の問題で苦勞する話。「長靴」は折角作つた長靴をコソ泥にしてやられる話。「母危篤」は、その電報に接して急ぎ滿洲から故郷の家に歸り家族、親戚の連中等に會ふ、そのこまかな記録。「良心」は子供もある主人公が、若い女に誘惑されさうになり危ふくそれを切り抜けて妻の許にかへる話。「幼きもの」は滿洲に住む或る母の、子供たちについての記録。

「慾に絡る二つの話」は「捕らぬ狸」と「青色のダイヤ」から成り、前者は一種のファース、後者は避難露人にひつかけられる話である。

以上によつて、十九篇悉くが、滿洲を背景とした（若しくは滿洲と深い關係のある）作品であることがわかるであらう。大正十三年の末に、私達はすでにこのやうな作家を有してゐたのである。

清島氏はその後、暫らくして滿鐵を辭し、日本に引きあげられた。が、事變後、氏は再び渡滿し、

奉天の鐵道總局で人事の仕事をやつてゐた。本名は貢。憩本の薩であつて、蘇水は阿蘇山に因み、また氏が崇拜した牧水の水を採つたものであらうと思ふ。

五〇

こゝに、加藤郁哉氏について少し書いて置くべきであらう。

當時、加藤郁哉氏も長春にゐた。露西亞語に通じてゐる同氏であるから、滿鐵對東支鐵道關係の仕事をやつてゐたのだらうと思ふ。尤も、滿鐵のことであるから、一應は車掌からやるといふ過程を踏んで行つたのだと思ふ。その頃、日本では『日本詩人』といふ清新な詩の雜誌が出てゐた。日本詩人會の編輯で、たしか新潮社から發行されてゐたと思ふ。加藤郁哉氏はこの『日本詩人』に時折詩を發表してゐた。貨物列車の車掌車にぶら下つて行くといふやうな題材の詩があつたことを私は覚えてゐる。筆名今枝折夫によつての活躍は後年のことである。

#### 第四章 『我らが文學』、淺利勝、甲斐水棹など

清水信といふ歌人が口語歌運動をやり、『郷愁』といふ謄寫版刷の雜誌を出してゐた。はじめは福島から出してゐて、後に奈良に移つた。

私はその『郷愁』に長春から作品を出した。

煤煙の冬の街だが

見上げると

空の一方に青さはあるよ

遅い馬車

老いた馬車夫は高々と  
鞭振るけれど馬にあてない

恐れてゐて貴くも思ふこの胸に芽生えた反抗精神の生長！

後悔を

感じたくない

あへぎ乍ら

過した生活の

かけらとかけら

肥えた

支那の女が

兒等呼びながら

元日の  
家の前に遊んでる

野のはてに堇の花を拾ふ日は雨霽れを吹くひやつこい風

こゝに一つ畑の緑の葉の中に濃い茶色に咲く金盞花

二等車の入口に立ち二等車のまばらな客を眺めて旅する

寒村の小驛に人と急行の電車を待てば牛のなく驛

山峽の村に見るこの霧の濃さ電燈が消えて夜があけかゝる

朝八時妓樓の肥えた女らが煙草くはへて列車見上げる

ふと中年の女の着物のにほひなどがされてゐる朝汽車の中

川原にうつすら煙あげてゐるアンペラ小屋の潤ひの色

によつきりと一本、毛布の間から出てるのは足です、汽車、少女、旅

姉妹が戯れてゐてつい読んで本から心がうばはれるのです

列車のなかに一人を守り誰も知らぬ一つのことを考へてゐます

ひとり旅窓に向つて動かない女のみぶん考へてゐます

以上のやうなのが當時の私の作品であつた。また、大正十四年一月には私は『私らが文學』といふ

謄寫版刷りの私家版的な小雑誌を出したものであつた。それは第一號を一月に、二月は休んで、三月に第二號を出した。私と柿沼實が主な執筆者だつた。

第二號の巻頭に「〇」と署名した私の「時論」なるものがある。今、『藝文』誌上で、この十八年前の小文を紹介するのもまんざら無意味ではなからうと思ふ――。

#### 滿洲と文學雜誌

滿洲を代表する一の文學雜誌があつてもよいと思ふ。往時『赤陽』の如きは、可成りの充實さをもつて活動したものであつたが、今これと言つて指示し得る何物もない有様だ。詩のみ、俳句のみ、に布陣する小雑誌はあり、又評論雑誌、××の機關雜誌で頁を文藝に割くものもあるが、前者は限定的安住的で、後者は氾濫的非本質的である。

その希望する雑誌が出現した時に、地方的特色としては、謂ふ所の植民地情調氣分氣質もあり、郷愁者の美しい詩句もあらうが、それらを超えて時代は、世界主義精神の實現、民族と民族との觸れ合ひ――その表現を要求してゐる。

我らの小さな力が、何を爲し得るものとも思はぬが、その必要な芽生の爲に、肥料としての役目



の一部分を果し得るならば幸甚とする所である。(〇)

右の如きものである。大正十四年三月、既に私達には「滿洲を代表する一つの文學雜誌」を要求してゐた。また幼稚な表現によつてではあるが、特色を持つ滿洲文學の出現を待望してゐたのである。……私達の當時の希望が實現されるまでには、かなりの時の経過が必要であつた。

この私達の『我らが文學』がやがて『ドンキイ』と變形した。私はその時長春を去り、楠沼實がバトンを受けて、ついでこの題名を變へたのであつた。

『ドンキイ』も最初は謄寫版印刷だつた、が六月號から活版印刷になつた。七月は休み、八月號はまた謄省した私が編輯し、この時はリーフレット型になつてゐる。白抜き文字の題字は楠沼が自分で彫つた木版を使つたことを記憶してゐる。

『ドンキイ』には短篇、短い戯曲風なもの、短歌(口語歌)それに感想、小評論などが掲載された。一度、大連の甲斐水棹女史の寄稿を得たことがあつた。女史の最初の歌集『花あかしや』の出来直後であつた。

知る人もあらうが『花あかしや』の終りの方では新傾向的乃至は「生活派」的と言つていいやうな作品が收められてゐる。口語歌など作つてゐた私はその部分に共感したのであつた。それで手紙を出したのであつたらうか。その記憶は判然しないが、女史から貰つたハガキに、雄渾な筆蹟が躍つてゐたことをはつきり記憶してゐる。(一部には甲斐水棹つて男ぢやないかなどといふ評判もあつた。水棹をスキトウと呼び、その雄々しい詠ひ振りにさういふ印象を得たものであつたらう。私はすでに『花あかしや』を読んでゐたから、女史のことは知つてゐたが。)

——因みに、こゝで私は『アカシヤ』第四卷第八號(昭和十四年八月發行)甲斐水棹追悼號を引つぱり出して見た。同誌巻頭にある「甲斐水棹年譜」を見ると、まさしく『花あかしや』は大正十三年の十二月に出版されてゐる。

なほまた、この年譜の一部分は、當時の滿洲の文學的情景を浮彫にした感じで覗かせるに足るものがあるから、少し抜き書きしてみよう。

明治四十三年(註) 甲斐女史は明治四十二年に渡滿してゐる。

旅順河村藤綱翁主宰いさを會に入會、此の頃より盛に遼東新報及滿洲日日に發表す。

明治四十四年

一月一日 滿洲日日に短歌十一首を掲載す

十一月 大連浩然吟社入社。高阪景顯氏等と知り萬葉、古今、新古今集を研究。詩集の筆寫をなす、又海上胤平翁の指導をうく。

十一月 滿日紙上等に短歌を掲載す、ペンネーム さゆり子、白梅女、磯馴松等。

明治四十五年

一月 滿日社渡邊三角洲氏と知り新派和歌の指導をうく。(註、渡邊三角洲も古い人だ。「新派和歌」のみならず、新しい傾向の詩に、評論に、活躍の跡は長い。最近では『滿洲行政』等によく寄稿してゐた。現に新京に健在で、いま出版協會に在る。)

大正三年

滿洲詩社(渡邊三角洲主宰)同人となり機關誌『務』に短歌を發表す。

大正九年

角田笹舟、池内赤太郎氏其の他と廻覽雜誌をおこす。

曉社——赤陽社歌壇の選者をなす、同志に歌論連載。

大正十二年

五月 遼東紙上に新詩「早春」及「大連の四季」を發表(守田先生の作曲)

七月 滿鐵讀書會雜誌に「在滿の諸姉へ」執筆。

九月 極東週報に脚本「お人形」及「雀の子」を發表し、第二小學校兒童に實演せしめて好評をうく。

大正十三年

一月 南滿教育雜誌に「時代思潮と教育家」及び「藝術小論」を發表す。

四月 遼東紙上の新詩「園丁は去る」を發表す。

十二月 處女歌集『花あかしや』出版。(註、この時、女史は四十歳であつた。)

「明治四十二年氷土の解けをめた春大連の土地に足を踏み入れられました。それは日露戦争直後のことで、日本の文化はまだ鋤鉄の入らない荒土でありました。豊かな詩歌の感情に一杯だつた先生にも、この荒野に直向して感慨無量であつたのでした。

日本橋まだ土橋なるころに來て赤壇の道に泪おとしき

先生の胸のうちには切々として短歌の道を通じて日本の大陸文化の建設が深く根ざしてゐたので

ありました。」

六〇

——後年、弟子の一人によつて女史はさう描き出されてゐる。

前記年譜にも出てゐる渡邊三角洲氏の追憶記の一節を引用しよう。

「私が甲斐さんに會つたのは、明治四十五年の春まだ浅い頃のやうに記憶します。私はその前の年の夏大連に来たのですが、その頃滿洲日日新聞に讀者から受取つた短歌を、よからうが惡からうが、全くその儘組んで置いてそれを適當な行數だけ埋草に使つてゐたのでした。この結果は中味も外形もどうにもならぬものが載るかと思ふと、然るべきものも組捨てるものに會ふこともあるといふわけでした。で私は社の事業として直接その方に關係はないが、野球記事と共に兼業としてこの二役を自ら買つて出で、寄稿中から適當に取捨加筆して掲げることにした。これが二箇月ほども續くと、めきめきとよくなつて來ましたが、拙くても作者には絶對であるところの作品を、勝手に修正するといふことは無責（任脱落か）と考へて、渡邊三角洲選として適當な數を適當に按排して掲げることになりました。これで二三箇月すると人が多くなつて一日一人一行としても十何人、大てい三十行を費す様になりました。自然標準を高くしました。この初めの一年程の間に大連の角田笹舟、甲斐水棹、森野直樹（島東吉）牧雨蛙、旅順の彌吉筑紫、遼陽の清島蘇水、貔子窩の池内蛙（赤太郎）などの諸君でありました。やや後れて他に數人の婦人連中も出たが、甲斐さんが一番年長でした。」

甲斐さんはさうした私の周囲に集まつた人々のうちの一人でした。これより先、甲斐さんが新聞に寄せてゐた歌稿は他の人に較べて多かつた。そして又全く形の整はぬといふものないと共に「これは」といふやうなものも少なかつたのでした。これは初歩時代であり、當時の小學校教師といふ常識生活の中にあつては當然と思はれましたが、これを知的よりも情的に取扱ふべき事を返事を出しましたあと、子供連れで訪ねて下さつたのがはじめての面會でした。

うちあけたところ、甲斐さんのこの行き方は容易に改りませんでした。で、私はまづ形式を整へる事を話しました。つまり一通りの形は整つてゐるが夫れ以上の事はない。それには、そのうちのいいと思つたものを充分推敲する事です、そしてそれが進むうちに自づと思想方面も進んでゆくでせうと話した事です。

かくするうちに仲間連中の作もよくなり、新聞に到底それを容れ難いので同人雜誌を作らうといふ事になつたのが『務』です。私は同人に對して決して私の眞似を勧めませんでした。それはスバル、早稲田文學以來、あまり私が他の人と行き方がちがつてゐるのを知つてゐるので、私の作をこ

のまま「見本」にはしたくなかつたのです。そして選にあつてもよくその態度を生かしてゐるものを選び、語法的に疵があれば正す程度にしました。

このゆき方はわるくすると例へば新交響樂團の連中のやうに、能のないのに自己を出さうとする缺陷を生ずる虞あるものですが、同人の多くはよく理論を控へて己を立ててゆきました。これは結果に於て佛蘭西音楽のゆき方でした。さうして同人諸君は自己を見出し、かたはら中央連絡をつけた人に、アララギの池内赤太郎と水麴の甲斐水樺氏があり、共に間もなくそれらの團體中での新進と目せられ、やがては甲堅として大いに矚目されるやうになつた事でした。

この二人のうち池内は八年前死去しました。(前引『アカシヤ』より)

さて『ドンキイ』のもう一人の寄稿者について書かねばならない。それは淺利勝である。彼についてはすでに若干を前に書いたが、ここには私が昭和五年に編輯刊行した『淺利勝集』に収めた追憶記から彼の経歴や人となりを拾つてみたい。

先づ學生時代からの一友人は書いてゐる。

## 1

情熱、坦率、痛快、突飛、經驗者、君の特性を表現する言葉は頗る多い。

が、燃ゆるが如き情熱と、鐵の如き信念とは、自分が斯くと信じたことに反對する者、又は自己と主義主張を異にする者に對しては、先輩、知友を不論、何處迄も反抗して行く性癖があつた。

だから、極度に愛される反面に、又反對者もかなりあつた。然し君の純眞味だけは、君を知れる總ての人が、等しく認め且愛して來た處であつた。

## 2

君を初めて知つたのは、大正九年四月、長春商業の開校日だつた。新帽に滿鐵徽章をつけ、きちんと飛白を着た、色白の君の姿は、未だ鮮明に思ひ浮ばれる。そして初會の私の胸に、恰恻な感と言ふより寧ろ夙成といふ第一印象を與へた。中學に二年と、沙河口工場にも一寸ゐた關係であらう。

その四月二十四日、開校式を終つた午後、和泉、難波兩君と共に四月、日本橋通りの舊舎の二階六號室に入れられ、圖らずも、共に起臥する身となつた。同齡の關係上、二人は自然話も含ひ、一緒によく勉強もした。

其頃の君は、極く眞面目だつた。熱心な勉學家だつた。そして、中學を二年終へてゐた關係で、英語と劍道が特に得意で、第一學期の成績も、六十名中第五番だつたと記憶してゐた。

3

第二學期の末だつた。君の精神上に、一大轉變が起つた。十一月三十日の朝、令姉危篤の入電、直に歸連したが間もなく逝去。弔ひを終へて歸校したが、十二月中旬、學期試験初日の朝だつた。流石に悄然として元氣がない。暫く休校せる上、何等の準備なく、直に其日より受験、神ならぬ身の焉んぞ好成绩を維持し得やう。結果は急轉的に下らざるを得なかつた。

令姉の死に、人生の無情と寂寥を感じた君は、暫く室内に姉の靈をまつり、朝夕弔つて僅かに自らを慰めてゐた。が間もなく慰安を小説に求めて行つた。

4

二年生末頃より小説に親しむ。菊池寛、久米正雄等の作物が多かつた様に覺えてゐる。

青春時の誰しもが持つ特性でもあらうが、奇を好み、奇を衒ふ性癖は、此頃から殊に胚胎して行つた様に思はれる。

其頃會では、毎週一度、しるごとくことになつてゐた。食事の鐘と共に、胸に、「六號室選手」のマークを掲げ眞先に駆け込んで大食、以て得意然としてゐたものだ、今は故人の井關吉男君等が、涙を流しながら、忙し相に喰つたのも、當時随分有名な特種だつた。

5

三年生の春。校風肅清の目的で、君が主となつて正義黨を作つた。生意氣だと目指された下級生は、片つ端から、柔道場又は理科室に呼入れられて説教された。

處が黨員の顔觸れが、従來餘り先生の信用が無かつた關係から、間もなく學校當局の注意する處となり、主謀者は職員室に呼ばれて行つた。手厳しく取調べられた。辯明の要旨は一々記録され、法廷に於ける犯罪者の訊問と何等異らなかつた。當局者の調査は尙各方面に及んだ。

それから一箇月の後、又呼ばれて行つたが、この時は、黨の主義と其効果は認められてゐた。だが此黨も一年と續かなかつた。

6

四年生頃は、づつと、支那町に近い田原洋行の裏二階に寄寓してゐた。もう此頃は、教科書其處除けで、専ら小説を読み、創作に専心してゐた。「桃色の封筒」等は此二階で讀んだ様に思つてゐる。(中略)

は又、創案し、計畫して行く、獨創力の男だつた。だから行商もし、洗濯屋もやり、靴屋も初め、陣頭に立つて靴磨も経験したのだ。

君は又、義侠的な男だつた。弱きを助け、強きに抗した。知人の困苦に木炭を贈り、飛行機の壯舉を聞いては義捐金を蓄へ、又は犯人をも隠匿してやつたのだ、人に頼まるれば、身を顧みず、飛込む處に、君の特性がはつきり見出される。(下略)

このやうな男だつた。その淺利は『我が文學』に「珠數」を、『ドンキョー』に「子供が熊に食はれた話」を發表してゐる。ともに、愛すべき、微笑ましい短篇である。そのほか、彼がこの頃書いたものに「從兄」「主人」「豫言者」「秋なすび」「むしん」「ロシア町」「苦きビール」「封書」「トランク」などがあつた。

前文犯人隠匿事件は彼らしい挿話であつた。

加藤郁義氏は斯う書いてゐる。

「淺利の商賣のことを少し書かう。淺利の商賣は誰でも知つてゐるやうに靴磨だ。彼は大連での

創始者である許りでなく、京城での創始者だ。一體彼は長春商業を中途で退學してから、何だつて京城なんかに行つたのか？これには彼が俺に話した面白い挿話がある。——郭松齡が一旗擧げた時の事だ。大連の電氣遊園下の廣場に瘦せ細つた體を古オーバに包んで、離れると見えない無精髯を口の周圍にはやしてうそ寒く兩手をポケットに突込んで立つてゐる淺利を想像すると面白い。淺利は何時の間にか郭軍のクラークかなんかになりすましてゐる。郭松齡の麾下に參する滿洲浪人を三十人も集めて、それ／＼旅費を渡して北上させる爲、勞捕をやつてゐるのだ。彼は若い顔を心持ち上氣させて、ともすると心の隅から小英雄的な感慨が浮んで來るのを、寒さに紛らせてゐた。伏見臺から吹き降ろして來る風が一行になぐれて、ちよつと悲壯な情景を呈してゐる。すると突然風の中から警官が現はれて解散を命じた。彼はその夜、しよんぼりと列車で奉天に舞戻つたが、長春時代の舊師のもとに寄食し旅費をめぐまれて京城の友人のもとに走つた。話は前に戻るが淺利が、播磨町事件の首魁と知るやうになり、川崎が殺人後淺利の家に逃げこんだのは、此の當時の深い縁故ではないのか……一説には長春時代から交際があつたとも云ふ。(大内記——確かに、長春時代から交際があつた。私も知つゐる。)京城では洗濯屋の店員になつたが、彼の事だから大いに働いたに違ひない。何年目かの或夏の夜の「ブブラ」に、途中で主家の娘さんに出逢ひ、何と言つたか聞

きもらしたが、口を利いた爲逆鱗にふれ、人中で親しまうに口を利いてお呉れないよ、とやられて、今度は淺利が感情を害して飛出し、何蕉、腕一本で俺の勝手に働くんだと、靴磨を始めた。そして洗濯屋時代のお得意を片っぱしから磨いて行つた。その後はどうして京城を後して大連にやつて来たか、乾度、大連には母上も、兄上も居られたからの事だらう。それとも一つは滿洲ツ子だから矢張り滿洲に歸つて来たのだらう。

或る日、淺利がやつて来て大連で靴を磨くと云ふ。俺はその前から、大連の奴は道にめぐまれてゐるくせに靴を始め履物類の手入れが不行届なのが氣になつてゐたので大賛成をやつた。彼は忽ち滿鐵に入り込んだ。市内の會社商店、手をひろげた。彼の氣質は至る處で愛された。回数券を賣つて自轉車を買つた。彼一人の手では磨き切れなくなつて、公學堂出身の子供を使つた。一人、二人三人と殖えて行つた。彼は日曜日は早朝から得意先の家庭へ進出した。靴の修繕を引受けた。便利屋式に家庭の御用を勤めた。鮭を賣つた、シロップを賣つた。哈爾濱製の腸詰を賣つた、サラシを買つて禪を作り、大町桂月の猿又亡國論を振りかざして、獨身宿舍を獲つた。彼の越中は、ナプキンになり、手拭になり使ひ古して禪となる三徳禪といふものであつた。太平洋横斷飛行に献金する爲、浪速町の街頭に立つて靴を磨いた。青年議會にもはせ參じた。彼の活動には休息がなかつた。

云々。

近頃、建國物語などがよく描かれ、その前驅としての青年議會のことなども扱はれてゐるが、淺利などもこの青年議會の一議員として活躍したものだつたのである。

ここに、郁哉、武士、冬衛の諸氏がやつてゐた朱冬會での淺利の句を抄して置こう。

クリスマス氷れる天に祈りけり

やうやくに約したる日や降誕祭

節分や下駄を番して寺男

春の畫湖面に落ちて石一つ

大雨や鵲の巢を思ひけり

石楠花を煙草とかへし木樵かな

椽側の猫ながながと日向ぼこ

枯蓮の根元をあさる小魚かな

網を下す濱に人なき夕時雨

奥座敷あかりほのかに金屏風  
兵營や殘花のもとに銃槍せり  
青蟲を新樹の中のみつけけり  
蟻一つ行きつ戻りつ新樹かな  
埃多き小店の棚に水中花  
軍艦旗赤くくだりて春の海  
文がらを浮かせてしばし春の海  
杏咲く小山のほとり地鎮祭  
支那町にほこらしげなる杏かな  
庭にある鉄の光や竹の秋

七〇

## 第五章 満日の小説募集 『大陸生活』 『満洲短歌』

大正年代に満洲日日新聞が長篇小説を募集したことがあつた。それは一回に亘つて行はれたのだが、第一回の分は手もとに記録がない、ただ確か瀬野皓太氏が當選したやうに記憶してゐる。瀬野氏は満鐵圖書館にゐた年輩の人（或ひは風貌のせるで、そのやうに年輩と見えたりとも知れないが）で、相當に當時の満洲文學界で活躍した人だつた。

第二回の方は小生、記録を持つてゐる。といふのが、私もそれに応募し、次席になつたからであつた。

當選者は上岡ヨトといふ女性だつた。作品の題は「苦惱の光」。大正十五年の九月一日に發表になつてゐる。

當時の満日の記事を書き寫して見よう。



「滿洲文運の促進と向上とに向つてそが木鐸となり闘士たらんことを念とし、從來尠ざる努力と犠牲とを拂ひ來つた事については讀者諸賢の夙に認識せらるゝ通りであつて吾社としても素懐の遂行に聊か欣快の情を禁じ得ざるものがある。」

◇ この大旨に基き、滿洲を背景とし地方色の色調に富んだ清新なる作品を隠れたる作家に求め、滿洲文壇のために一層の貢獻を致し文運發展の一路へ精進せんとする止み難き欲求の下に、前に第一回懸賞募集を行ひたること讀者の記憶に新たなるものがあると信ずる、而してこの第一回の成績に鑑みて更に第二回の募集を發表したことも一般讀者諸君の知らるる通りであるが、應募者諸君の絶大なる努力の賜である幾多の力作を得て締切ることが出来、爾來慎重なる審議を重ねたる結果を本日の上紙に發表し得るに至つたことはその衝に當つた吾々として何ともいへぬ愉快を感じざるを得ないのである。

◇ 應募者の總数は第一回に比してやゝ劣つたやうな感があつたが、それでも十五名を算することが

出来次第である、而して應募者各位が職業的文筆の士としてでなく全く一種の熱烈なる趣味から公務の餘暇を割いて炎暑と闘ひつゝ、腦漿を絞られた越斯<sup>ユツクス</sup>とも見るべき或は汗と血との結晶とも見るべき金玉の名篇を寄せられたことに對して滿腔の敬意と感謝の意を表したいと思ふ。

◇ 先づ第一に吾々を悦ばせたことは、第一回の募集社告の發表と締切期日との間に餘り多くの時日がなかつた爲め力作の暇がないといふ多少の怨聲をきかぬでもなかつたのに鑑み、今回は時日を多少延長した關係からかと思ふが、一に力作に接したことである。

◇ 吾々は數回に亘りて熟議を凝らした結果、佳作として左の四篇をあげることとした。

苦惱の光

上岡 コト

受難の花

宮田 ふじ恵

地上の唄

越下 假想兒

北方の衝にて

大内 隆雄

これ等四篇中より入選のものを選び出すために更に商議を重ねたこと勿論であるが、岩田、城下

兩氏のもは兎に角として上岡、大内兩氏の作は夫々に長所があつて何れを探るべきかについて大いに迷はざるを得なかつた。といふのは作全體の感じ乃至出來榮からいつて大内氏の作品は遙かに上岡氏のものに勝つて居る。想といひ物を視る眼といひ地の文に會話に實に見事な出來榮を示して居つて、このまゝ中央文壇へ持ち出して無名ながらも新進作家として識者の眼をひくに足る程の力作であると稱しても過賞でないと思ふが、作全體の調子が新聞小説として餘りに寂しすぎる、又局面もやゝ狭きに失するやの感がある。

◇

これ等の諸點を考查するとき大内氏の作は捨つるには惜過ぎる次第ではあるが新聞小説として稍物足らぬ感がある。最後に残つた上岡氏の作品を探ることにした」云々。

その後、上岡氏たちがどうなつたかを知らない。別に作品活動もしなかつたやうである。城下假想兒とは誰かの假名であらうが、これも判らない。宮田ふじ恵も不明。

また、この小説の選は、上村哲彌、加藤新吉、能登博などの諸氏がやつたやうに後で聞いた。上村哲彌は今『公論』を出してゐる第一公論社の社長である。——建國直後の頃は彼は文教部にゐて、一

日撫順へ向ふ列車の中でひよつこり會つたところ、

「こんな廣い農場を持つた大學を作りたいのです！」

といふやうな大氣焰を聞いたものだつたが、これは大分後の話である。

懸賞募集と言へば、遼東新報が短篇小説の募集をやつたものであつた。そして、その選者は水野葉舟であつた。私も何度か出し、數回當選したことがあつた。聞けば、吉野浩夫君なども常連だつたやうである。

私の作品では「新年と人妻」「暗い船室で」「或る國民黨員の死」などがあつた。

「新年と人妻」に對して選者は次のやうに批評した。

「今回の中で一番貴族的な心のリズムをあらはした作品であつた。美しく且つ靜かで、そして鋭さをその内につんで持つてゐる。デリカスイのある作者の心持ちをなつかしみながら讀んだ。あんまり聞くなつてゐるのは缺點だと思つたが、第一回第二回の全體を通じて、(大内記す——これは第十三回分だつた、第十二回から水野氏が選をすることになつたのだらうと思ふ)誰のよりも文明だと思つた。」以下略

「暗い船室で」への選者の評。

「この作の表現の自由さが先づいゝ心持ちであつた。よく描き得る人だと思つた。そして元氣のいゝ心の持ち主である。ただ、この作はディテールズの平均がやゝ失はれてゐる。それは残念なことであつた。もつと自在であるべきものの見方が少し煩はされてゐるためである。しかし今回の中では最も勝れてゐると思つた。」

この時には福馬貴美子といふ人の「夕暮」といふのがあり、それへの批評と並べて掲載された。

「或る國民黨員の死」は身近かになつた實際の話を書いたもので、自信もあつた。

これへの水野氏の評は次のやうなものであつた。

「實に面白い題材である。いつも何でもない戀愛ばなしばかりを聞かされてゐる身に、これは何だか人間の心を本當に打つ事實に直面した氣がした、しかし、この作品はもつと深く眞剣に人間の魂にふん込んで行つて、その上で書かれたものだつたら、どんなに愉快であつたらうと思つた」これが第三十二回であつた。——この募集、少くとも三十何回は續いたことが知られる。大正十五年から昭和二年へかけてのことであつた。

大正十四年、『滿蒙』の三月號に私は張資平の「植樹節」といふ小説を譯して送つたのが掲載される。

その目次を見ると——

中國共產黨と勞農政權	橋	樸
支那の新文化運動の歸趨に就て	柴	甲
支那の現政局	准	汀
支那民謡から觀た家庭と婦人	稻	川
大連圖書館より	柿	沼
	生	生

等の項目が拾へる。准汀はY・Tで、高柳保太郎將軍の筆名であつた。柿沼生は柿沼介氏。稻川淺二郎氏は後に滿系文學のためにも力を致した人だ。

同じ月の『新天地』の目次を寫して見よう。——

支那革命の行詰状態	橋	樸
在外國居留地論	中	滋
	義	久
國民黨の六長五短	船	橋
	半	山
	樓	樓

移住期より見る在朝鮮人素質  
滿蒙産業統計整備の必要

大連市制の改廢問題

グループに入るまで

無産黨代議士の素描

斷々室元語

九條武子夫人と白蓮女史

深尾須磨子女史の詩

八手の花

南國集(短歌)

梅(同)

浅春(同)

赤塚 正朝

野中 時雄

石田 禮助

田邊 羊三

小村 直登

村井 太郎

春日 晃一郎

千田 萬三

松崎 柔甫

小日山 直登

伊藤 五丈原

瀧口 武士

山口 慎一

扇谷 貞一

富田 充

雲と温泉(同)

未柘の池(同)

七夜鈔

攝津間櫛

マドロスの血(創作)

係(創)

西田 猪之輔

五 丈 原

緒方 春海

安西 冬衛

三島 隆譯

中村 無六

コマチエリン作

右のやうな賑やかな顔觸れである。後の日の鐵鋼統制會の親玉、今の滿鐵總裁も、麗歌人を語つたりしてゐる。春日晃一郎とは支那通で文化人だつた高久肇の筆名。小説を譯してゐる三島隆は長春商業の先生で、後に滿鐵調査課に轉じた。小説を書いている中村無六は、滿鐵の調査課に於て英語の翻譯をやつたりしてゐた男だつた。

昭和二年の十一月、大連で『大陸生活』といふ雑誌が創刊された。社長は飯河道雄だつた。

石川鐵雄、田邊敏行、小日山直登、内堀維文、上村哲彌、高塚源一、山田睿峰、立川雲平、板橋辨

治、早川己之利、難波勝治、橋樸、菊池秋四郎、田原天南、浦田繁松等が寄稿してゐるが、文藝方面では、柿沼實の隨筆、朱城、佐賀田日見雄、朝山寥々子、城川濁流、高林蘇城、江川三昧の俳句、加藤郁哉の詩、創作に瀨野浩太の「ある風景」、上野光の「盜難」等がある。

柿沼の隨筆は断片的にいろんなことを書いたもので次のやうな一節がある。

「亞社の瀧口武士君が内地から奥様をつれて來たそうだ、未だ拜顔の榮を賜らないが仄聞するところによると瀧口君と瓜二つだそうだ。安西冬衛君は武士君に先んじられて、いさゝか神經過敏の徴候あるらしいといふ、これもうわさ話。」

その後には私が彼に出したハガキの文句をそのまま勝手に書きつらねたりして、「吹いて飲むかゆのうまさや秋のくれ」といふ俳句で結んでゐる。

『大陸生活』の第二號には、淺利勝が「散步封書」を發表してゐる。短いものだから引用しよう。

### 散 歩 1

洋畫家のM氏は、右にステッキ左に女優と軽く散歩して居られました

洗濯屋の小僧はそれをうらやましげにみやりました

だが、小僧はM氏のセルの襟がひどくきたないのに氣がついたので

### 散 歩 Ⅱ

主人の娘に彼は町で計らずも出會つたのです

彼は何氣なしにやあと云ひました。娘は一寸とめいわくしたらしいのです

彼が家に歸ると娘は彼に申しました

あんな人の澤山通る所で聲かけられては困るよ少し考へてもらはなくては

彼には考へるひまもなかつたのです

封書

九時を過ぎてゐた、妻は洗濯をしてゐた

玄關に人の氣配がした。役所の給仕である、妻は手を拭きながら一通の封書を受け取つた。それは夫の名刺に走り書きでこう書いてあつた

山田のお嬢さんが御病氣の由、すぐ見舞に行け

給仕が返事はと聞いた

「ええ、わかつてゐます、と答へると妻は洗濯もほつたらかして出て行つた

山田とは役所の主任である

浅利らしい作品であつた。

この號には大谷武男が「チエホフ小惑」と「ある日曜日の朝の風景」を寄せてゐる。(今は大谷武夫と書いてゐるが、以前は武男だつた。)「チエホフ小惑」は短いものだが、大谷君らしい研究的なもの、後者ももの靜かなスケッチ風のものである。

柿沼實は「仇討異聞」といふのを寄せてゐる。彼らしい才分を見せた讀物である。

「月日」十七年を矢の様に廻つて、もとの松並木へ来る。(十七年間、重二郎も又一郎も病にもかゝらず、死ななかつたことはいへん大きな小説に都合の良いことであります)といつた叙述である。

三島隆はア・ブディシチエフの「森の兄弟」といふ小説を譯してゐる。

「讀者頌分」といふ欄に次のやうなものが出てゐる。

「殺風景な諸洲、よるとさはると不景氣不景氣といふ大連、金錢の話——物質以外には何物もないやうな土地に住んで居る我々青年は、いつの間にかズル／＼と此の物質の渦中に引き込まれて行くやうな氣持がし、不知不識の間に荒んで行くやうな心地がします。

此の時にあたつて貴誌のやうな文藝雑誌の出たことは我々青年の救です、貴誌よ貴誌が聲明さる

やうに滿洲にも滿洲の詩があり、歌もあります。我々はあくまで貴誌が健實なる發達をとげられて、滿洲の精神界に盡すところあらんことを期待して止まないものであります(沙河口の「青年」)。「御誌が大陸に生活する私共のための文藝雜誌であり、そして家庭雜誌であるやうにといふ理由で生れたことは妾どものやうに實際大陸に生活して居るものにとつては非常に結構なことだと存じます。今まで滿洲には家庭的なものや、文藝的なものがなかつたので妾共は、しかたなく内地の雜誌を讀んで居ました。けれども、どこかに物足らぬ感じをおこさせて居ました。妾達は御誌がもつと家庭的記事を澤山のせていただきたいと思ひます。そして婦人の手になつた文藝的のものも出していただきたいと思ひます。(千代子)」

當時の若い讀者の意見を代表してゐるものであらう。

なほ同誌には、大連で文藝座談會を開催する旨が豫告されてゐる。場所は日本橋滿鐵俱樂部。會費三十錢。世話役は大連新聞社の三井鶴吉、大陸生活社の竹田齊治。

大正十四年來、私は長春實業新聞に各種のものを寄稿して來た。「歌へる日本人——民謡の歴史と其主流に就て」と題して、十三回に亘つて連載したものがあつた。また孫愛縁といふ支那婦人の手記

を「過ぎ去しかた」の題で譯載した。

大正十四年の滿鐵の『讀書會雜誌』五月號には「朝鮮の古戰場」といふ短篇風のものを出した。平壤に旅行した時のことを扱つたものであつた。

『讀書會雜誌』九月號には「南山寮南京蟲の歌」といふのを發表した。戯れに書いたものを加藤新吉氏に見せたら、同氏が發表するやう手配してしまつたのだつた。そのため、九首のうち、二首は私の作でなく、加藤氏のものするものである。

「これは悪魔二つの穴を残して姿を見せぬ南京蟲です」

「今日もまた南京蟲の喰つた跡のかゆさ掻き掻き血を出しました」

南山寮の南京蟲は全く物凄かつた。

大正十五年には長春實業新聞に張養平の「密約」といふ短篇を譯して載せた。

昭和一年には郭沫若の「落葉」の一部分を同紙に譯載した。「落葉」は日本人の一女性が一支那留學生に宛てた手紙から成つてゐる小説である。

また孫愛縁の「母の去りし夜」といふのを譯載した。

實は大正十四年の春から昭和四年の春まで私は上海にゐたのだつた。尤も年に一回は滿洲へ歸つて来た。

そのやうなわけで、この時期の事情については、以上のやうに殆んど自分中心に、しかも断片的にしか書けなかつたことを御了解願ひたい。で、以下昭和四年頃からのことを書く。

昭和四年、私は大連に歸つて来た。

この年の五月、『滿洲短歌』が創刊されてゐる。

黍稈をめぐらす家に照れる陽の明るさに吾はしばしなごまむ、  
八木沼丈夫

ぬばたまの夜をかなしく口さめたる鴉鳥は鳴けりわが足音に  
富田 充

おのづから畜生どちはしたしかり鴉は豕の背にして遊ぶ  
上村 哲彌

鋪道はぬくもりふかし支那の兒ら 尻あらはに群れ坐りあつ  
城所 英一

妻ながく臥りてあれば朝戸出の音が後追ひて子らは泣くかも  
加藤多満喜

深みゆくやまひ癒やさむと二十四のうつしこの身に傷つけにけり  
三木 靜子

癒えがたき病と直らし老父は今宵もうまゐしたまはぬかも  
江口とり子

草咲かばふたゝび來むと乙女子の誓ひ愛しもはや咲けすみれ等  
若林 初枝

さばかりの若き命においてなほ死を思ふやと陽はうらゝなり  
北川 文子



まむかひてもを言ふとき首を搖る愛しきくせを持てり吾妹は

八八  
小山 暎雄

まがなしきをとこをみな落書のある亭の壁我も見にけり

武田 尊市

教へ兒を下思ひつゝ異國に楯を買はしけむうづのその楯

池内 赤太郎

野の果の小さき驛にときつぐる鶏を驛夫が飼ひならず鶏

森 厚

これらが創刊號を飾つた諸氏の作品であつた。

## 第六章 昭和初年の短歌壇と詩人たち

前章に『滿洲短歌』が昭和四年に創刊されたことを書いたが、短歌雑誌としてはこれより先き、昭和三年に西田猪之輔氏らの『合萌』が創刊されてゐた。

昭和六年末頃に調べたものに依ると『合萌』を刊行した滿洲短歌會の會員の顔觸れは次の通りである。

西田猪之輔、外川よしみ、松山みそぎ、木村いおり、淺野高俊、池淵鈴江、佐藤鐵之助、高尾雄峰、西島貞子、西澤流、河上知風草、末野彌、寺本初音、近藤銀子、長内澄、出舟水尾、安藤英子、荒川石楠花、永原いね子、深山幽明子、志賀折夫、鈴木澄秋、秋森清子

この内、西田猪之輔は最後は滿洲電々の幹部として先年病逝した。歌集『み奈ゆく』がある。當時は滿鐵にゐた。恰幅も良しし、宛然『合萌』の頭領といふ印象を私達は受けてゐた。

『合萌』はこの西田氏のもとに良い輔佐役がゐたのであらう會の組織などはなかなかしつかりした運営が行はれてゐたやうである。

作品では私は西島貞子氏のものに敬服してゐた。満鐵沙河工場の幹部の方の夫人だつたやうに記憶してゐる。後年歌集も刊行されてゐる。

永原へは子に醫師で繪を描く永原織治氏夫人、若い連中を可愛がるいゝ小母さんで、私も一度お正月かに某女性に誘はれて家に遊びに行つたことがあつた。後年、歌集『鍵盤』を出してゐる。

池淵鈴江の後年の『作文』同人としての活動は知る人も多からう。

高尾雄峰は奉天の満日にて、いま九州の錦州新報に移つてゐる高尾憲太郎である。近年は映畫批評や映畫政策論に力を入れてゐるやうだが、彼、昔は小説も書き短歌も作つたものである。若い頃からでつぷり肥えた豪傑型の體格だつたが、それでゐてなかなかの感傷家だつたのだ。

一方、『滿洲短歌』に據つた面々は次の通りである。同人といふことになつてゐるが、必ずしも嚴格に同人組織が確立してゐたわけではないやうである。

八木沼丈夫、城所英一、原眞弓、富田充、河東茂次郎、川邊悌二郎、峰尾滿久、有吉春雄、青木實、木田晴夫、河瀬松三、森厚、三溝沙美、上村哲彌、香川末光、河瀬みち子、三木靜子、柿本靜江、

若林初枝、中島節子、野中雄次、高崎昌彦、大塚白穂、池野善雄、長谷川兼太郎、太田廣賢、出口王仁三郎

出口王仁三郎とはどうも變だが、この男も實に澤山の、驚くべき量の歌を作つた、ひねり出したといふことは巷間傳へられた噂で、また事實であるらしく、それに滿洲にも來たことはあり、寄附金でもして、同人の末端に加へて貰つたのだらうと思ふ。尤も『滿洲短歌』としてはそんな金などを有り難がつたらうなどとは思はれぬ。その送つて來た歌が面白かつたので、これを載せたといふだけのことであらう。

八木沼丈夫については、世人多く周知のところであらう。私個人のことを書くと、彼氏は當時私の勤務した職場で私の直接の主任であつた。あのギロリと光る凹んだ眼玉には昭和四年以來のお馴染なのである。……この間、大同劇團の會の歸りに丸山海介と磯部秀見と街を歩いたら、彼は支那事變の初期に北京で八木沼と起居をともにしたのでさうである。そして八木沼は磯部をつかまへて「おい少年！少年！」と呼んだものだといふ。(丸山海介も若いよ！と小生思つたことであつた。)

ともあれ八木沼は『滿洲短歌』の御大としても、一家の風格を成してゐた。簡單に言つてみれば、あの長身を首から上を少しそりまげるやうにして、ギロリ眼玉を光らして、悲壯調をもつてものを言

ふ、或る點まで來るとワツハツハと笑ふ、おや笑つたなと思つて本人の顔を見ると、若蟲をかみつぶしたやうな顔をしてゐる。そんな風な姿態から生れた風格である。右肩を怒らせた風格である。八木沼に何十首かのすぐれた短歌作品があることは確かである。殊にその朗々誦すべき莊重、悲壯の調べは高く評價されてよいであらう。尤も、この莊重悲壯は一種の詠嘆に通じてゐる。それも觀念だけの空響のやうにしか受け取れぬ場合さへある。肩を怒らせた彼の姿勢が其處にも出てゐるのである。その頃の彼の作品を若干書き抜いて見る。

やはらかに水すべりゆく吉野川百舌鳴きとほすこゑのするどさ

吉野紙渡けるを見つつ心さへほとほと遠しいにしへおもふに

木の香立つ杉の紅身のしたしさや霧のはれ間を露重りにけり

山國に子と生れしかば流れよる香立ちしたしくかき分けにけり

海こえて十年経にけるむなしさや吾にしく沁むおもひあり

陸奥の吾家の山に霜ふりて柿も乏しくなりか過ぎし

天誅組こもりし村に秋陽さし柿あかかと熟れにけるかも

以上は昭和五年二月號の「大和、山城行（三）」から採つたものである。同じ號に小生のものが八首出てゐる。敢へて新しい形式に據つたものだつた。三首だけを抜いて置く。

胸に思ふ　ことひとつもちハルビンの冬の夜更けの街路を歩んだ

戒嚴令が　十一時二店を閉めさせる裸形の女の收入が薄い！

聲あけて歌ふ踊り子よ！

ウオッカよ！

汽車の時間だ！

ドスヴィダニヤ

また同じ號に、**富田充氏**が書いた「歌會記」といふ一文がある。これには私も出席した。こゝに満洲短歌的雰囲気を紹介するためにその一部を書き寫して見る。

『満洲短歌』は創刊以來九輯を重ねて來た。みんな歩調をあはせて専心作歌に精進して來たので進境著しいものがあり、各々のゆくべき道もおのづから拓けてきたやうである。

ところで此際、みんな顔をならべて一日をゆつくりと過したい、未知の人たちと逢ふことは一層親しさを増すであらうし、お湯につかてお互のしむらを眺めることも興があり、食事をして勝手に馬食振りを誇ることも味があり、その上歌の話でもすれば、好きな道だけに日頃の鬱憤を吹き飛ばして、大いに痛快であらうと思はれたので、懇親會を兼ねて短歌會といふことにし、一月十九日午前十時から、松山台ラジウム温泉の一室に、みんな集つて貰ふことにした。

當日いろ／＼準備もあらうと、定刻よりは少し早目に出かけて、松山館の玄關に靴をぬぐと女中さんが「おひとりお待ちで御座います」と云ふ。さても殊勝なお方だと感心して、長い廊下を渡つてゆく。冬枯れの庭土に雪の名残りはあはれであるが、地に敷く光りは、なんといつても小春日和である。部屋に入ると、魁は鞍山の加藤多喜氏であつた。遠路御出で下さつた氏の熱心がまづ嬉しかつた。そのうちぼつ／＼みんなの顔がそろつてくる。早速お湯につかることになる。お湯好きの八木沼氏が率先してみなに入浴を奨める。風邪氣分の加藤氏や、やせ肉の私（私も同様風邪の氣分）にまで、奨めること甚だ急である。

浴後、しばらく寛いた座談で時を過したが、就中、昨秋旅行された八木沼氏の柿實る大和山城地方の歌謡に富んだ話は、私たちの歌ごころをそるに十分で一同熱心に聴いた。ひきつゞいて歌を

つくることにしたが、特に題を設けず、席上、自由に無制限につくつて貰ふこととした。(以下略) さて同人中、『城所英』については前にも書いてある。當時の作品に次のやうなものがある。

むらぎもの心もしぬに畏れたれかたちなき子のいま生れむとす

・病院に妻を送りてぬばたまの歸り路を塞く風は鳴りつる

みごもりてふたつき経ぬるさびしきやふ寝床に妻の眼の大いなる

鋭心は疲れ果てたり風のをと鳴りのはげしも聴きつつ吾が寝む

——『滿洲短歌』一〇輯より——

富田充の精進については知られてゐよう。當時の作品に次のものがある。

勤務より歸りきたりて部屋ぬちのこもるにほひに息吐きにけり

洋服と着物に換へてころぶしぬ買ひわすれたる煙草を欲りぬ

茶をいれてひとり吸ればひとりなる生活のことに思ひいたりぬ

時すぎし夕餉にむかひうつなしひたすらわれは魚むしりつつ

九六

——一五輯所載「獨居」より——

同人中に青木實の名があるのは、最近の彼をしか知らぬ人には奇異であらう。が、青木君は以前には短歌にかなり親しんでゐたのだと思ふ。

河瀬松三は永い間、滿鐵の『讀書會雜誌』の編輯をやつた温厚君子人である。のち滿洲國政府に入り、いま國立中央博物館にゐる筈である。當時の作品に次のやうなものがある。

とよもして給つたひゆく呼子の音やひしひしと寄るまびごころかも

白楊の巨幹たけにのこれる光りさへうすれゆきつつ夕ざりにけり

——一〇輯所載「濃霧」より——

溝沙美は後に日滿商事に轉じた三溝又三である。短歌人としてより俳人として知られてゐる。

「合誌」『滿洲短歌』と、その後、甲斐水榊のあかしや會が出来、この三團體が相對峙するといふ形になつた。水榊大漁支社あかしや會會員は昭和六年末頃の調査では次の通りであつた。

甲斐水榊、安永廣子、荳村芙蓉、大下三雄、山崎かすみ、谷山つる枝、甲斐慧、山本枝折、濱坂日出男、野口節子、野口靜彦、森節野、宇野節子、角谷靜江、須野憲二、森谷つたお、谷岡智子、安見士筆、春野芳子、山田茂、神場磨須子

この會では主宰者が女性であり、會員にもはつきり女性が多いことが注目される。記憶が定かでないが、一度だけ『合誌』と『滿洲短歌』で合同歌會を開催したことがあつた。私も『滿洲短歌』側の一人としてその會に出席したが、割り合ひ和氣藪々たる會合であつた。言はば他流試合なのだから、多少し眞剣な論争なども行はれるのかと豫想したのであつたが、そんなことはなかつた。短歌とはやはり大宮人の流れを汲む文學なのであらうか。それとも、日本的文人のたしなみとでも言ふべきものであつたらうか。

筆者は昭和の初め頃の滿洲の歌人たちについて多くを語り過ぎたやうである。いまは、その頃の詩人たちについて語るべき順序であらう。

私はいつも思ふのだが、いつの時代、何れの國に在つても、一つの文藝興隆の詩潮の魁けをなすのは詩——或ひは、詩の運動であらうである。滿洲の文學がつかまうであるのだが、滿洲の日系の場合に於いてもこのことは例外ではなかつた。詩がいつも先頭に立つて来たのである。

大連で刊行されつつ、しかも日本の詩壇へまで清波なものを吹き込んだ詩誌『亞』の活躍についてはすでに前に書いた。詩誌『亞』は北川冬彦、瀧口武士、安西冬何等を育てて、第三十五輯をもつてその輝かしい歴史を終つた。

昭和四年、加藤那哉の詩集『逃水』が出版された。加藤那哉は永く滿鐵に在り、露西亞語に通じ、『日本詩人』、『亞』などに作品を発表してゐたのが『逃水』出版の頃には大連に歸つてゐた。

大連では『逃水』と同じ頃に、吾川賢一郎の『老子降誕』が刊行されたので、この二人の詩業を祝する出版記念會が日本橋圖書館で開催された。その頃、出版記念會など、滿洲ではまためづらしかつたと思ふ。龍小堀、龍崎などが肝照りをやつたとの記憶する。記念寫眞を見ると、いははれる加藤那哉、吾川賢一郎を前に、西田猪之輔、橋本八五郎、平野博三、西創生、稻葉亨二、高崎恭爾、城小雄、それに小生などの顔が見える。橋本八五郎は當時日本橋圖書館長で、萬葉集に造詣深く、後には滿洲文話會の役員として盡力した。武藤弘報局長が發文指導要綱を日滿軍人會館に於いて發表する

や、翌日弘報處に乗り込んで「しかと實行する肚であるか？」と念を押しに行つたといふ好漢である。『龍野傳』はジャパン・ツーリスト・ビュローに在り、隨筆などをよく書いてゐた。西創生も初期滿洲文學の功勞者で、詩の雑誌を出したりした人。「滿洲藝術壇の人々」といふ大きな本を編輯刊行したことがある。それは興信録みたいな本で、それに長唄の師匠まで網羅したものだが、近頃言はれる藝能の内容をすでに當時に採用してゐたわけだ。稻葉亨二、高崎恭爾、城小雄らは當時の若手詩人といふところであらう。

稻葉亨二、高崎恭爾、城小雄は和四年に詩誌『我克』を發行した。

『稻葉亨二』は、詩のほか出版業をやり、また昆蟲學をやり（彼が『滿洲』に發表した「ばぶんころがし」についての研究）は、文獻と實地觀察の兩方面から調べ上げた精細な研鑽の成果であつた。支那民族性の研究などもやつてゐた。古川の『老子降誕』も彼が裝幀をやつたのだつた。『我克』の表紙も彼の描いたものであつた。

『高崎恭爾』は滿鐵沙河工務場に勤めてゐた。旋盤工で一月五圓稼ぐさうだなどと若い真中が噂してゐたが、背版を着て會合などに出て来る彼はおとなしい、しつとりとした人物であつた。

城小雄は一風變つてゐた。

「僕、ジャンクのジョーです！」

100

『逃水』と『老子降誕』の出版記念會の時であつたか、彼は突如立ち上ると、そのやうにブツキリボーンな自己紹介をやつたことを私はいまだにはつきりと記憶してゐる。

「ジャンクのジョー」は『戎克』の城であつた。小確をまた正しく読む人がなかなかゐない。あれは『おうす』と讀むのださうである。（前後したが、稻葉亨二は「けうじ」でなく「こうじ」と讀む由である。）

城小確は本名を本家勇と言ひ、老虎灘街道にある或る醬油屋に勤めてゐた。稍小柄な身體に長髪をなびかせ、よくベレー帽を冠つて歩いてゐた。

昭和六年、城は詩集『黒麥酒の歌』を刊行してゐる。その前に、彼の編著として『塞外詩集』が出てゐるが、それは古川、稻葉、彼などの作品を集めたものであつた。

古川賢一郎は滿鐵の土地測量などをやる現場の方にて、當時はよく滿洲各地へ長期の出張をやつてゐた。彼の支那、滿洲民謡研究、滿洲社會觀察などはこの旅と勤勉の間に養ひ育てられて行つたものであらう。後はなほ『水道』、『蒙古十月』、『貧しき化粧』等の詩集がある。内地の『詩の家』、『幹』、『九州藝術』などの同人でもあつた。また滿洲郷土色研究會員としての活動も注目されるものがある。散文集には『芽柳』がある。

56117

古川賢一郎は佐藤惣之助あたりに師事したのだと思ふが、根は敘情詩人であるやうである。ただその取り上げる題材の半ば以上は滿洲の自然を背景としてゐるために、そしてまた彼の詞句が多くの場合、冷徹なものであるために、根本の敘情詩人たることを蔽ひつゝすくらゐのがつちりしたものが出来上つてゐるやうである。『老子降誕』、『水道』にはその種のものが貫徹してゐたと思ふ。これに比べて『貧しき化粧』には意識して敘情的な作品が集められてゐた。また『蒙古十月』は、民謡調の作品を集めたもので、異色あるものであつた。古川賢一郎はまた支那の民謡や、滿洲詩人の作品の翻譯などもやつてゐる。近來招かれて大連の土建協會に在り、いろいろな企畫に忙しいやうであるが、詩作や詩の翻譯にも大いに努めてもらひたいものである。

城小確の『戎克』以來の文壇世話人的な役割も注目さるべきものがあつた。『戎克』がさうであつたし、『塞外詩集』を出した塞外詩社といふのも城の經營に係るものであつたと思ふ。その後、大連詩會俱樂部を創設し、種々の單行本を出した。G氏賞といふのが久しく匿名に隠れてゐたが、實は城小確の寄附行爲によるものであることも後に明らかにされた。

城の『黒麥酒の歌』の後半に言ふ――

此の一群の浮浪者等は、白晝の大道で賭博に耽つてゐる。彼等は賭具は持たないが、替りし様に  
軒並に坐つて、向ふ角からあらはれて来るものを言ひ當てるのだ。例へば鳥なら鳥。無論言ひ  
當てたものが勝つのに決つてゐる。

次に来るものは次に来るものは。来るもの来るもの皆彼等の仲間ばかりである。彼等は勝負に對  
する興味を次第に失つてしまふ。それでゐてやけに聲高々と續けてゐる。

その次に来るもの、その次に来るもの、噓来るもの、来るもの皆彼等の仲間  
ばかり、仲間ばかり……

思ふに、滿洲文學の保姆としての城が、このやうな姿で、次に来るものを待望してゐたのではな  
らうか。

## 第七章 續・詩人たち、『塞外詩集』 『三人集』 『燕人街』 など

昭和四、五、六年頃の滿洲では詩が非常に盛んであつた。

前に『塞外詩集』について少し書いたが、説明不足であつたので、こゝに改めて書いて置く。

昭和五年六月の刊行で、編輯兼發行者は本家男、すなはち城小確である。

執筆者は――

安西冬衛、稻葉亨二、加藤郁哉、小杉茂樹、島崎恭爾、城小確、瀧口武士、古川賢一郎

以上の八人、何れも當時大連の住人であつた。そしてこのうち、安西冬衛は詩集『電燈茉莉』を、

加藤郁哉は『連水』と、古川賢一郎は『老子降誕』を出してゐた。代表作を抜いて、作風を一瞥しよ  
う。



黄河の仕事

一〇四  
安西冬衛

回回教は混凝土を發明した

Loiolo 族は巴里警視總監よりも優美である

甘肅省といふ文字は、建築群の機構を暗示する。私は埋藏された都市の發掘を、支那政府に建言する

燄焔の發火集中を見よ。地球開發會社に投資せよ

Yangtschians Baschad Express は、拉里テリー間の tube を要とする

主として藏地に於ける蘇吉類が作用する、軌道の峻烈なる腐蝕を避けるために

黄河は地球を削つてゐる

Catalyzer を興へよ

ミシシッピと河底を共産させるために

ここには、毅然たる視野の廣大さが注目されると思ふ。それとともに、ここには新しい東方のニキ  
ソテイシズムとも稱さるべきものがある。そして、それは稻葉亨二へも通じてゐる。すなはち

黄土層

稻葉 亨二

紹の群が素通りする

甘肅黄土層は一層黄いろくなつた

月が蠟を塗る

穴居民族が闇で燐を輝かしてゐた

の如くに

遼河の流水

(管口にて)

加藤 郁哉

一〇六

移しい白いものが行進する、それは流れるのではない  
黎明の塵を払い潜る無数の白いものの行列  
それはこの茫漠たる原野の荒い静けさの正體である  
ああ、この旺んなるものの動きを見よ、それは全宇宙の動きですらある  
しかし、これらは動きの爲の動きではない、これら白きものの流が一瞬にして凝結するのを私は  
一知つてゐる

これらは實に烈しい静けさの爲の動きである

ああ、このすさまじい情緒を見よ

この果て知れぬ原野にあつて

朝暁と共に誕生した熾烈なる思想を見よ

こゝには加藤郁哉のおほどかな作風が代表されてゐると言へよう。一方には次の様な作品もある

哈爾濱即興

——キタイスカヤ風景——

靴聲のやうに艶光りする夜です。

どうかすると行き違ふ拍子にお互の肩がばつと露にでもなりさうな夜です。

脇腹にかけてなんともとりとぬのない動きやうをさせてお嬢さんが流れてゐる夜です。

口紅がぬれてかきぼくろがいきいきしてゐる夜です。

ある家並を出はづれると風！

(みなみだな)

辻馬車の馬の匂が

闇の中にそらぶらうしみひろがつて

安全燈の赤ガラスが汗ばんでゐるのです。近よると駟者が鞭を動かす聽て、雪汁をはねかえして  
驅ける二頭馬車の上では

私の腕にお嬢さんがもうさつきから可愛い荷物のやうに凭れてゐるのでした

この輕妙さ。それが崩れた形に發展して今枝折夫——彼の筆名——の戯文的滿洲風俗案内となるのである。

小杉茂樹は「霧」と「秋」の二篇を書いてゐる。

秋

ビルディングとビルディングとビルディングとビルディングとに囲まれた菱形の海

菱形の海

といふのである。その頃の詩の一つの典型的なものであらう。これはまた島崎恭爾にも通じてゐる。彼の「大陸」といふ一篇は次のやうなものだ。

大陸

カノ白猫ハ地平線ヲ啣ヘテ勤カナイ

城小確の作品からは「遺産」を探らう。

遺産

故郷の友よ

父の遺産は黄塵に汚れた日の丸の旗ばかりだ

これには城の辯いつばいな詠ひ方があると思ふ  
瀧口武士の「旅順」を見よう。

旅順

旅順は三日月がある。なぜか非常に雅拙な街です。あの風光で風邪をひいて了つた。  
枯木の下に緑色のパノラマがある。空馬車が居る。氷塊が運はれて行く。シヤガールを想はせる  
道。

新月がある……婦人が鐘石に出て話してゐる。私はそこを俾で通る。

眺の外で入海が干潮を始める。閑静な街にはもう春が動いてゐる。  
山高帽の紳士が俾を待つてゐる。懷に手を入れてゐる。ステッキが横に出てゐる。踏聲者の窓か  
ら婦が首を出した。

私は新月のかかつた街を、無中に俾上で走り廻つた。

防備隊の阪は中川一政風なり、樹の間から郵便配達が来るに逢ふ。  
門を歩いてゐると電話がかかつてゐる。「婦人細棟六號空川口さん！」  
そんなのがけたたましく聴こえる街なり。

吉川賢一郎の「ニイ・リンの像」を探らま

ニイ・リンの像

野へ豚の仔を追ひながら

五月の微風のなかで

若い羊のやうに果んやりしてゐるが

あなたの腕は、蒙古犬の足よりも強く

あなたの胸は、青草の激しい白ひでいつぱいだ

背い鱗光をちらちらさせる

弱水の大きな目玉は

心情を生あなたたかく燻ぼらしてゐる

葉の味をしたあなたの唇は

笛の音のやうな愛情の予守唄をうたふ

ユイ・リンよ

あなたの嬌羞は、夕闇に飛ぶ白い蝶である

ユイ・リンよ

あなたの戀は、豫言の洞窟をよるこぶ

材柔らかな蝙蝠である

このやうな詩が昭和五年刊行の『塞外詩集』に盛られてゐた。この詩集、奥附の所を見ると検印票に中華民國郵票、それも「眼吉黒貼用」と黒字を印刷した半分のを使つてゐる。編輯者城か、裝幀者稻葉の好みによるものであらう。

『塞外詩集』について書いたから、それと對比される『三人集』について次に書こう。これは昭和六年に奉天の胡同社から刊行されたもので、土龍之介、高橋順四郎、落合郁郎の三人の詩作品を一冊

にまとめたものである。

、  
黄塵の底に喘ぐ奉天

五月の白天

土 龍之介

旋風は街々を馬賊のやうに襲撃する

人も、馬も、犬も、木つ葉のやうに追ひ散らされて渦巻き、吹きまくり荒れ狂ふ黄塵  
街頭は射殺された馬賊の體熱の生ぬくまだ

城市はじつとりと油汗をにじませて

疲労、倦怠、困憊

城壁は陰謀を孕んだ爬蟲類のやうに黙して動かす

城樓は徒らに高く黄天にさしのべた蒼ざめた世紀の觸手……

黄天には血のやうな日輪が喘いでゐる、疾風を突いて、黄塵の城裡深く潜入する影  
つぶてのやうな影！

北上夜行苦力列車

同

漆黒の曠野の闇に突入する列車の前燈の模索。咆哮する機關車の前方に光る軌條の直線の曲線の生命の運命の方向。闇を截る尾燈の赤線の速度の計算。——時速五十軒。激動する貨車の内部の測量器を携帯しない灰色の測量隊の一群を照明する古びた洋燈の怪奇な明暗の幼児の空腹の饑めく異様な群像の堆積と悪臭。激動する車體の生理的昂奮の意惑。破れ毛布にくるんだ家財一切と一家眷族を引連れた豚の如き一群の異状なる生存力の中に潜在する征服力。驚進する列車の貨車の内部の怪奇なる明暗の鈍重なる豚に似た異様な測量隊の彼等迫害と搾取と戦禍に追はれたる燕入群の驚進、北へ！

土龍之介たちは奉天で詩を中心とした雑誌『胡同』を出してゐた。

弟の手紙

高橋順四郎

兄さん手紙ありがとう

ケシナイツウの阿母は

床の上で起きたり寐たり

とつても喜んでゐたよ

阿父は田を旦那に取られてからは

毎日 阿母の着物を米婆さんの處に持つてつて

酒ばかり飲んで歸らない時もあるんだよ

阿父は酒に酔ふと、旦那のことを

畜生糞垂れと、わめいてゐるよ

兄さん 田をとられたんだからもう旦那ではないな——

兄さん 阿母は毎日メソ／＼泣いてゐるよ

俺ア學校は好きだけど休んでゐる

修公や平太郎が馬鹿にするけれど

毎日山に行つて草を取つて町に賣りに行くよ  
でも、近頃雨が降らないから少くなつた  
村の人は孝行息子だといつて賞めて呉れる  
俺アちつとも嬉しくはないよ、なアー兄さん  
賞められたつてなんにもならないものなア――

手紙着た次の日、町の郵便局に行つて

送つて呉れた金を取つて、阿母の薬を買つた

兄さん くすりつてたかいな――

残りの三圓 阿母渡したら

壘の下に入れて阿母は恐い顔をして

誰れにも云ふな、阿父にも云ふなつてよ

俺ア 鉛筆がほしいけれど……

俺ア 阿母の氣持ちがよくわかるよ

兄さん俺ア兄さんの處に行きたいよ

なんでもよいから働くよ

そして二人で働いた金を阿母に送つてやろうよ

阿父だつてもとから悪い人ではなかつたんだから

欺されて 旦那に田をとられたんだから

阿父も兄さんの處に行けと言つてゐるよ

でも 汽車賃がないから行けないんだ

兄さん すまないけれど

仕事があつたら汽車賃を送つてくださ

阿母が達者で暮らせつてよ

ではたのみます。さようなら

此處に来て、私達は今までに無かつた新風の吹くのに向する氣がする。高橋順四郎たちは大滝で詩

を中心とした雑誌『燕人街』を出してゐた。高橋の作品をもう一つ書いて置こう。

満洲秋の斷章

雑多な雲を孕んだ蒼空の秋である  
縹渺たる曠野は  
弱き口輪の光を金色に照りかへして  
凋落の前期を飾る野菊は  
楡木をなぐるほろ寒い風に戦いてゐる

×

木乃伊の様にやせこけた乳飲子を懐に赫土の一本道に細い影を落しては  
親子兄弟  
生活に追れた山東苦力の一團は安住の地を求め  
あえぎ／＼カラツボの水壺をさげ

弔ひの行列の様に重々しく過ぎ去る  
一聲 雁は南へ行くものに  
北へ——北へと

落谷藤の作品を見よう。彼も『燕人街』で活躍してゐた

苦力の詩

走り去るものを追ふなよ  
彼奴は野鷄と一緒にくたばる連中だ  
十年の計なんか汗と共に流してしまへ  
俺はさ前を信用してゐる、お前も俺を……  
……それだけでいゝんだ  
野が無限でも、俺達あ歩こう  
百疊よ、高くさえずれよ、足が軽いぞ



山東は双等にとられてしまつた

季節だつて俺達にや無關係だが

百靈よ、お前が鳴かないと淋しくなるんだ

昨日知つた友だつて、別れるのはつらい

だが笑つて送るぞ、彼奴は元氣で行つたから

胃の腑が一ぱいになつたら眠くなつたから眠ろう

明日はいゝ天氣になつてくれ

なほこの詩集には加藤都哉と古川賢一郎とが跋文を書いてゐる。加藤は言ふ――

「街頭の詩集――かういふ言葉がゆるされるものとすれば、まさしくこの詩集から受ける感じである。今までに滿洲にゆかりをもつ詩集、それから毎月のあちこちに散見する詩の大方は、せまいわたくしの眼界では、どちらかと言へば、美麗なアヤをもつ布片をつぎあはせ縫ひあげた、人形の着物のやうなもので、ひどいになると、糊と鉄とでベタ／＼やつて出来あがつたやうなものさへあるやうに思へるのは、わたくしばかりのひがめではあるまい。そのなかにあつて、少くとも、三

人集の作品は、従來の滿洲詩人の好んで書いたものとは、自ら異なつた世界を擲んでゐるさすがに、自ら「老兵」と言ふ、加藤長老だけの觀察であると言ふべきであらう。

それに比べると、古川の跋文はまるでそれ自體が詩みたいである。

「『吼えろ！』と誰かが云つた。それは嘘だ。先づ噛みつけ！である。滿蒙の民族は、現實のパンに噛み付く事が第一條件である。例へば、楊柳の林を突切る。其處には蛇行せる濁流がある。高粱畑がある。雪原がある。然も尙、追へども／＼近づけない、地平線上の逃水に向つて、吼えろ！と云ふのか。

あゝ、凄まじい音を立てて流れる、足元の氷河。千里の草原を荒れ狂ふ黄塵の龍卷。その中で、パンよりもウオツカのロシアレンペンだ。白と黒の密着日本人だ。そして汚れた朝鮮人の性殖と、支那百姓の薄い高粱粥だ。

私は三君の作詩中より、之等の渾沌とした民族の唄を掴み出そうとしたが、三君の詩は、未だ、日本人らしい潔癖を捨て切らないやうなものを見受ける。君達よ、山と水の美しい、日本の菓子を食べな。――これは強ち飢えた私の嫉妬ばかりではない。寛城子の支那兵士が、その頬と腰を砲彈にぶくられ、蟲の息になりながらも、ロシア船をしやぶつてゐる、私に言つた「涼水……涼水……」

と。

然し私は失望しない。今まで出た満洲の詩集の中で、これほど眞實な態度を持してゐる詩集を知らない。詩作品の善悪は批評家にまかせよう。私は三君が今後、満洲の泥水を呑み、蒙古の黄砂を吸ふて生長し、その將來に大なる風雲を呼ぶであらう事を深く信じてゐる。

## 第八章 稻葉亨二、石原巖徹や『街』『線』など

先般、稻葉亨二君から突然手紙を貰つた。同君の近状を知らずにゐたのだが、なんと何時の間にか同君は新京に来てゐたのである。同君は往年の事情について筆者にいろいろと教示を與へられた。そこで小稿に補正を加へる必要が生じて來た。同君が會つて勤務してゐたのは、滿洲輸入組合聯合會であつた。

同君の、ばいんころがしについての研究は『蕪蠹考』と題されてゐた。「蕪蠹考」の第三回を載せた『滿蒙』を筆者はその後篋底に發見した。古代エジプト人がこれらの蠹をいかに觀察し、そして、いかにそれをその工藝品にまで取り入れたかを考究し、轉じて支那の古い文献を探つてはその藥用としての效用を發見し、更に東西相通する媚藥としての用法を想到し、

「凡そスカラベ、サクレの歴史的意義は、藥用、裝飾用、宗教用としての人類に對する關係にあつ

て、之を大別すれば一は肉體的に、他は精神的に古來數千年間世界民族の靈肉に刺續され來つたのである。而も今尙幾多の謎を残して吾々の前に横はつてゐる。既に神格の高御座から引き下された今日のスカラベをして再び即位せしむべき幾多未知の事實が、唐土の地中若しくはエジプトの砂中からツタンカアメンの王墓の如く、此の事の光に發き出されんことを望んでやまない次第である」と結んだ絢爛たる、彼獨特の論稿であつた。なほ同君が裝幀をやつたのは古川賢一郎の『氷の道』『貧しき化粧』その他、『塞外詩集』、永原いづ子『鏗聲』等である。なほ同君は『黃土』といふ個人誌（詩、フランス詩、文學論翻譯、創作版畫）を出した由、これは筆者知らなかつた。また同君は康徳元年に詩集『夜航船』を出してゐる。

夜航船

中華は神經喪失の  
不治の疾に眠る  
闇を窺めて秘かに龍口を解纜した「永利號」  
山東の雜草を滿載して

渤海の夜陰に民歌を放つてゐる  
船長邦傑は突如戰慄を覺えて  
元寶を抱いたまゝ海中に身を委ねた  
船長を失つた火輪船は  
闇の支配に任せて  
消え行く燄火を俟つより外はない  
不安を身に帯びた工人群が  
流亡の相を知つて  
新たな燃料を  
船板に焚きはじめた  
野花は夜開く  
中華は亦動脈に針を入れたらしい

蒙古狗

巡捕李順は俄國染料によつて呼倫貝爾の染り行く相を贗原特有の落景の如く眺めてゐた  
 恐るべき野火が雜草を縫ふて甘珠爾の大廟に迫る

ノロが渴泉を食り

カモシカが火にすくみ

群鳥が焼野に狂舞する

咆哮する嵐

蒙古包から吠え出た狗の群

忽ち溢れて染料の密輸者に躍りかゝつて往く

これ等の詩二十篇を収めたもの、巻頭に渡瀟する苦力群の寫真がある。

稻葉君の版畫については前にも書いたが、圖畫會等にも出品したのであつた。

古い雜誌類を探してゐると、『滿蒙』昭和三年五月號に木村莊十が「奉海鐵道を觀る」といふのを  
 書いてゐることを發見した。無論例の直木賞を得た、後年の大衆小説家である。「奉海鐵道を觀る」

は堅い文章だが、それでも。

「……大洋上に一隻の船が姿を消して行つた、極めて簡單なる一環末事は地球圓しといふ一大發見  
 を爲さしめたのである。同じ様な場所と同じやうな眼で林檎が地上に落ちたのを見た人は幾人か  
 あつたであらう、しかも何等の疑問を起さなかつた人は同様にそれを見た夫と同じであつた。張  
 作霖氏の最近の態度に疑問を起さざる人はそれに等しい。買渡り過ぎる點はあるかも知れぬが、  
 筆者は、奉天から北京へ出た張氏は、明かに北京にある大元帥の張氏で、昔日の奉天の張氏では  
 ないと斷言することが出来る。圍繞する人々も昔日とは同一であらう。明日の運命は兎も  
 角その考へにしたところで、昔の張氏よりはその輪廓大ならざるを得ない。」

といふやうなところには、いかにも大衆小説作家らしい物の見方、敘述の仕方が豫示されてゐると  
 思ふ。なほその頃の『滿蒙』を見ると、樂田天馬氏の『聊齋志異』のあの獨特な翻譯、三浦義臣氏の  
 『封神演義』の翻譯、そのほかでは井上葉吉、大島瀧明、岩淵甚四郎、横澤宏、森田富義、中溝新一  
 大野斯文、赤塚吉次郎、石原巖徹、佐々木秀光、大谷武男、加藤郁哉、稻川淺三郎、西田猪之輔等の  
 諸氏が書いてゐる。

中溝新一先生は私が知り合つた頃は大連の滿洲文化協會（一時は中日文化協會とも稱した）に在つ

て「満蒙」の編輯をやつてゐた。その以前には大連新聞で學藝欄を擔當、初期の滿洲文藝界に力を致した人、童話の大家で、詩を書き、廣い趣味を持つた小父さんだ。先生は聖徳衛に住んでゐたので「笑吐空」などといふペンネームを使つた。那迦三藏とも稱した。S・Nをもちつた惠須園といふのもあつた。

ペンネームと言へば、加藤郁哉の今枝折夫は前に書いたが、春野櫻華とは誰だつたか？ 薩南翁一郎は藤山一雄氏だつた筈だ。

石原巖徹先生は最近では『月刊滿洲』誌上で大いに活躍してゐるが、この人のペンネームは相當なものであつた。先づ石敢當（これは滿映の近藤伊與吉先生が最近にやつと石敢當をフェード・アツプしてフェード・インすれば石原巖徹になるといふことを發見したと書てゐるくらゐだから、内情を知らん人も多からう。）それから俳人としては沙人。川柳となれば青龍刀。それでゐて、本名は石原秋朝といふ——（これはほんとに知らん人が多いだらう）……尤も、學生時代には蚊とんぼのやうに痩せてゐたさうで、それが今はあのやうにペン／＼たる太鼓腹、歩く時には臍を中心に、右肩、左肩、右足、左足を妙に搖つて歩くといふほどに肥えてしまつた。それくらゐの變化振りを見せる人だから、ペンネームの使ひ分けぐらゐ屁でもないであらう。閑話休題、この石原先生と筆者は數年間机を並

べて働いたものだ。先生、もとより東洋豪傑の士——（あれで、青島でむかしは外交官だつたといふ洋服の腰に日本手拭をぶらさげながらである！）——朝に悠々と出勤する。晝食は喰はなかつた。その代り嗜味精神並びに肉體の休憩——つまり晝寝をやる。しかし仕事をしてゐた。ポイントを外さない仕事のやり方であつた。——とき調々交々などあり、興至れば支那劇——一齣をうなり出すこともあつた。その唱は必ずしも巧者だつたとは思はないが、彼氏らしい感慨に溢れたものであつた。（先生、目下東北交通附業局參與といふ職に在る。「一味樓雜記」の改め「望喜樓雜話」いふ、譯えて在大陸邦人に教ふるところ多いのを喜ぶとも、先生の詩囊をす／＼豊かにらんことを祈る！因みに、「望喜樓」は「ヒマラヤを望む」の意の由、何處までも大きい。）

大島瀧彌氏は今も健在。上記の連中のうち、岩淵甚四郎、佐々木秀光は殊異分子だつた。と言ふのは一つには暫時滯滿組の意である。岩淵甚四郎といふのは、ちよつと變つた人物で、東京藝文界の事情に通ずるとともに、日本料理に通じその方の師匠になれる腕を持つてゐるといふ御にだつた。佐々木秀光は青年詩人、その後どうなつたか知らないが、當時は新鮮な内地藝文の滿洲への導導者であつたと思ふ。別な見方をすれば、近頃のやうにいるんな文士連中が滿洲へやつて來る。その魁けをした人物だつたとも言へると思ふ。

文士と言へば、平林たい子と大連との關係も忘れてはなるまい。手許に材料がないので、年代が不明確だが、彼女は大連で當時の夫君某と苦闘の生活をした。それが後に彼女の「施療病院にて」といふ當時評判高かつた一作となつたのだと聞いてゐる。筆者はしかし彼女とは一向面識も何もなかつた。

もう一人、中西伊之助がゐる。彼は「汝等の背後より」その他などで知られるやうに「朝鮮もの」へそんな言葉はなかつたが、並びに東京交通労働關係で有名になつたのだと今思ふが、私は大連の一下宿屋で彼に遇つたことがある。その時、彼がどんな話をしたか忘れてしまつたが、彼の何に當るのかその下宿屋のお主婦らしいのがひどくバトロン女振つて彼の面倒を見てゐた姿態だけが記憶に残つてゐる。彼が雑誌『東洋』に連載した「アカシヤの町」とかいふ小説があつたが、それは無論大連を舞台としたものであつた。ちよつと尾崎士郎に習するやうな風貌であつた。昭和初年、上海で會つた前田河廣一郎にも似てゐた。(近頃中西のことを聞かないが、前田河は時々翻譯を出したりしてゐる。些かの感慨無きを得ない)

内地から來た文士では黒島傳治を案内したことがあつた。確か古川賢一郎と一しよだつたと思ふ。その時、小崗子のP屋を見て廻つたりしたあと支那料理に行つたのだが、黒島が海鼠は氣味が悪いと言つてどうしても食はなかつたことを覚えてゐる。シベリア出兵に行つたといふ彼にしてだ。それだ

から——そんな風だから後年肺病になり瀬戸内海の小島で療養しなければならんやうになつたのではなからうか？

滿鐵では年々文士・畫家などを招聘した。菊池寛、里見淳、直木三十五、齋藤茂吉、横光利一、久米正雄等々といふ人物がやつて來た。當時としても、作家は作家なりに滿洲を見、そこから題材を得ようとしたのであらう、滿鐵としてもそれによる滿洲宣傳といふ効果を狙つたのであらうが、一面在滿邦人のための教養に資するといふ目的もあつた。夏期大學などもそのために催されたのであつた。

(私は當年の『木浦』の「唯物史觀と現代の意識」と題した四回に亘る講演を忘れ得ない)

また、これら作家の心構へも、近時來滿する作家たちのそれとはかなり違つてゐたと思ふ。それは客觀的情勢がさうさせてゐたのである。だがまた、それだけに、以前はのんびりとしたゆとりもあつた。

洮南蒙古境。行旅太艱辛。驕卒漫遮路。健兒吠向人。(謂蒙古狗、一種蒙古狗)天陰朔尚夕。草短

夏猶春。霜白朔邊土。風黃沙漠塵。(地主曹達、白似霜、沙漠風起、黃塵滿天)風中忽聽銃。車

上欲廻輪。朽木存胡祀。(城中一老榆樹、胡人祀之、今既朽)新城多漢民。(洮南本胡、人遂牧

地、清末始置府）霍懲催醉早。羌笛引愁頻。喜遇同鄉客。唱酬出與親。

三二

これは興謝野寛の「滿蒙雜草」の一篇である。ゆとりある風情ではないが、招かれて北原白秋が来たことがあつた。先生は筆名の同郷の大先生。郷里へ歸れば「白秋シエンセイ、白秋シエンセイ」とみな崇敬してゐる大先生だ。（――追記、先生は昭和十七年十一月二日逝去された。畏き過りではその文藝の道になせる功に對し勳四等を賜ふた）

この詩聖、さながらの童心の持ち主で、大連の協和會館でも童話について語つたが、内地各地での歡待に慣れてゐると見えて、滿洲の田舎ではどうもわしを歡迎してくれんと言つて寂しがり、同行者を困惑させたといふ。

しかし、白秋先生は滿洲の知らぬ以前から「雪の降る夜は楽しいベチカー」「鬼待ち待ち木の根つ子」などといふ滿洲的、滿洲向き童話を作つてゐたのだから、實地に來たことなど恐れだ先生にブラスしたか。尤も、それよりなほ以前「行こか戻るかオローラの下を」の作があり、全日本を風靡したのでから、ベチカーや滿洲鬼ぐらゐ何でもなかつたらう。

聊か記述が横道へそれたが、森田常義氏には滿洲の傳説をまとめた著述がある。赤塚吉次郎氏は新

京商業の校長にもなつた。稻川淺二郎氏は教育畑の人で、滿洲の民謡の採集などをやつたが。初期の『明明』を育て滿系新文學のために盡した功績を忘れてはならないであらう。

さて、こゝまで雑誌『街』のことを書こう。それははじめ昭和五年、六年に膠寫版刷で出た文藝雜誌であつた。

昭和六年一月號を見ると、金子與助、栗宣子、永里正徳、楠本善和、山崎抱遙、松本武雄、喜入哲三、篠垣鐵夫、鈴木秋花が編輯同へとなつてゐる。――この内、篠垣鐵夫、鈴木秋花と私は知り合つた。篠垣鐵夫は、かの中村秀男君である。

この前期の『街』については私は多くを知らないが、それが昭和六年の六、七月には後期の『街』として活版刷で出ることになつた。先づその更生六、七月合併號の目次を示さう。

扉 諸兄姉へのレボ

詩 墓の中になる街

民謡 毎飯不忘（劉太白）

高尾 雄二

城 小確

冬木 卓譯

創作 るんべん苦力

稻葉 亨二

同 朝開く窓

高尾 雄二

同 やくざな話

青木 實

同 わらふ魏怡春

志賀志賀之助

同 朝から次の朝まで

篠垣 鐵夫

同 撰ばれたる者(戯曲)

三沼 柳子

隨筆 旅、女、文學

大内 隆雄

コント 霧の街を行く

藤木 美邦

同 配達夫

英 靖男

短歌 寺本切音、近藤銀子、長内澄、出丹水尾、安藤英子、荒川石楠花、永原いね子、源山

幽明子、志賀折夫、鈴木澄秋、秋森清子、外川よしみ、杉山みそぎ、木村いおり、淺

野高俊、池淵鈴江、佐藤鐵之助、西島貞子、西澤流、

以上のやうな目次だが、高尾雄二(今の高尾憲太郎)の扉の言葉を紹介しよう。曰く、

「一句の趣意書も改めて必要ない。何の理論も述べずに信じたい、たゞ信じたい、理解ある諸兄

姉を。

街角にあがつた文藝運動！ 行進せよばなるまゝ。

私は知つてゐる。小さい文藝誌ではあるけれど——、理解と同情ある諸兄姉は、然とがつちりした力で屹度守りたて、下さる事を私は知つてゐる。どこの地方でも文藝雑誌の二つ三つ位は出版されてゐる處のない土地はない。此處で皆様と唯一の本誌を育て、行く……と言ふのだ、この土地の上に私達はどんなに美しい果實を孕くむと言ふのか、貴方は知つてゐる。私は知つてゐる。貴方を信じてゐる。何が何でも信じてゐるのだ」

文章はだいぶん稚いやうに見えるが、純情拘すべきものあり、更によく讀めばその底に烈々たる心構へのあることもうなづかれよう。

この「街」の更生といふのは、舊「街」が鈴木秋生の手から、高尾の經營に移つたことを意味してゐた、高尾を最も助けたのが篠垣、次いで筆者等であつた、稻葉亨二君も好意ある援助を惜しまなかつたやうである、その表紙も同君のものだつた。

並んだ顔觸れも當時の滿洲として相當なものと言ふべきであらう。その人々の後年の活動振りとは今